康治本傷寒論講義
理科大漢方講座（1988.10）

PDF No.05-1　康治本傷寒論講義理科大漢方講座（1988.10）　1
桂枝湯、第4条、第5条　2
桂枝加葛根湯、第6条　3
桂枝加附子湯、第7条　4
桂枝去芍薬湯、第8条　4
桂枝去桂枝加白朮茯苓湯、第9条　5
長沢元夫説　①表裏内外の区別　②傷寒論での傷寒中風のとらえかた　6
白虎加人参湯、第10条　6
　42条、43条　7
甘草乾姜湯、第11条　7
　芍薬甘草湯　8
調胃承気湯、第11条　9
第23条　9
四逆湯　第11条　10
第12条　10
葛根湯、第12条　11
第13条　11
葛根加半夏湯、第14条　12
麻黄湯、第15条　12
青竜湯(大青竜湯）、第16条　13
第17条　13
桂枝二麻黄一湯、第25条　14
桂枝麻黄各半湯(桂麻各半湯）、第23条　14
小青竜湯、第40条、第41条　15
銀翹散　15
桑菊飲　16
乾姜附子湯、第18条　16
麻黄甘草杏仁石膏湯(麻杏甘石湯)、第19条　17
茯苓桂枝甘草大棗湯（苓桂甘棗湯）、第20条　18
茯苓桂枝甘草白朮湯(茯桂朮甘湯)、第21条　18
茯苓四逆湯、第22条　19
芍薬甘草附子湯、第23条　19
梔子豉湯、梔子甘草豉湯、梔子生姜豉湯、第24条　20
第64条　20
真武湯(玄武湯)、第25条　21
第59条　21
小柴胡湯、第26条　22
第27条、第28条　22
建中湯(小建中湯)、第28条、第29条　23
黄蓍建中湯(金匱要略)、大建中湯(金匱要略)　23
大柴胡湯、第30条　24
桃仁承気湯（桃核承気湯、桃人承気湯）、第31条　24
血の病証　1）血虚、2）陰虚　3)血瘀　25,26
逍遙散(和剤局方)　26
加味逍遙散、黒逍遙散、桂枝茯苓丸　27
当帰芍薬散、膠艾四物湯(芎帰膠艾湯)、血腑逐瘀湯　28
補陽還五湯、膈下逐瘀湯、少腹逐瘀湯、大黄牡丹皮湯、抵当丸、大黄䗪蟲丸　29
陥胸湯(大陥胸湯)、第32条　30
第33条　30
半夏瀉心湯、第35条　31
小陥胸湯、柴陥湯　31
十棗湯、第36条　32
生姜瀉心湯、第37条　32
甘草瀉心湯、第38条　33
黄連湯、第39条　33
黄芩湯及び黄芩加半夏生姜湯、第40条　34
白虎湯、第41条　34
第47条、第65条　35
大承気湯、第45条　35
小承気湯、増液承気湯、茵陳蒿湯、第46条　36
桂枝加芍薬湯及び桂枝加芍薬大黄湯　37
黄連阿膠湯、第52条　37
附子湯、第53条、54条　38
桃花湯、第55号　39
呉茱萸湯、第56条　39
甘草湯、第57条　40
白通湯、第58条　40
通脈四逆湯、第60条　41
猪苓湯、第61条　41
少陽病、陽明病、太陰病、少陰病、厥陰病の定義　42
五苓散　42
理中丸（人参湯）、枳実葱白桂枝湯　43
四君子湯　43
四物湯　44
補中益気湯　44
六君子湯　45
八珍湯、十全大補湯　46

理大
漢方講座

1987 10

No.

桂枝湯

		発汗（悪寒、発熱）	鎮痛（頭痛）	鎮痙（項強）	強壮健胃
桂枝	3両	散寒解表	気の上衝を治す		行血、和味・芳香性健胃剤
芍薬	3両		止痛	筋肉の拘攣を治す	補血
甘草	2両		止痛	筋肉の拘攣を治す	補虚益気
生姜	3両	散寒解表			和味・芳香性健胃剤 鎮嘔
大棗	12枚		鎮静		補気健胃

第4条　太陽中風、陽浮而陰弱、陽浮者熱自発、陰弱者汗自出、嗇嗇悪寒、淅淅悪風、翕翕発熱、鼻鳴乾嘔者、桂枝湯主之。

太陽中風 → 陽浮 — 熱自発 — 嗇嗇悪寒 — 翕翕発熱 → 桂枝湯主之
太陽中風 → 而 陰弱 — 汗自出 — 淅淅悪風 — 鼻鳴乾嘔 → 桂枝湯主之

陰症とみれば水鼻が出てずるずる音がすること。
乾嘔も陰症で起る症状。

※太陽中風が陰病に分裂することを第2条でなく第4条で説明しているのは、第3条の太陽傷寒の方が陰病に分裂する可性性が大きい事を示したものである。

第5条　太陽病、頭痛、発熱、汗出、悪風者、桂枝湯主之。

※第一条の状態から、病気が進行して第5条の主症状頭痛、第6条の主症状項強という二つの病状に分裂することを論ずる為に置かれている。
つまり病気の進行する系列の違いとして表現しようとしたもの。

※第5条は中風系列

※第5条で頭痛としか表現していないが、実際は項強を伴っている

No.

桂枝湯を構成する薬物について

① 桂枝、芍薬、甘草が主要なもの。

i) 桂枝と甘草の組合せ ⇒ 気の上衝による心悸、頭痛に用いる。

宋板傷寒論「発汗過多、其の人叉手(こっしゅ)して自ら心を冒(おお)い、心下悸して按ずることを得んと欲するものは桂枝甘草湯これを主る。」

ii) 芍薬と甘草の組合せ ⇒ 筋肉の攣急に用いる。

宋板傷寒論第1條「芍薬甘草湯を与えて以って其の脚を伸ばしむ」

② その他の薬物の共力作用(シネルギズム)

i) 桂枝と生姜 ⇒ 辛温の性質を持ち、温める作用を示す ⇒ 悪寒をとり除く

↓

ii) 〃 辛温即ち発汗解熱の作用 ⇒ 発熱をとり除く。

③ 生姜と大棗 ⇒ 健胃作用の増強

i) 第4条の乾嘔のように直接、生姜の薬効が必要な時

ii) 発汗剤を服用して胃をそこなう事を予防する。

iii) 胃腸を整え薬物の吸収を良くする為。

No.

桂枝加葛根湯

		発汗(悪寒、発熱)	鎮痛(頭痛)	鎮痙(項強)	強壮、健胃
桂枝	3両	散寒解表	気の上衝を治す		行血、手足、各種性健胃剤
芍薬	3両		止痛	筋肉の拘攣を治す	補血
甘草	2両		止痛	筋肉の拘攣を治す	補虚益気
生姜	3両	散寒解表			辛味、各種性健胃剤、鎮嘔
大棗	12枚		鎮静		補気、健胃
葛根	4両	散熱解表		筋肉、特に肩のこりを治す。	

第6条 太陽病、項背強几几、反汗出、悪風者、桂枝加葛根湯主之。

※第5条と同じように第6条でも、項強には頭痛を伴っている。

※第6条は第一条より分別した傷寒系列。

※第6条で発熱を挙げていない理由は、第5条での症状の述べ方が頭痛発熱、汗出悪風というように4字づつになっているのに対し、第6条では項背強几几(反)汗出悪風者と5字づつになっていて、この間に発熱の2字を入れると文の調子をくずすことになる。その上に反ってと言って陽症の強いことを示して、陽症の発熱の存在を暗示している。

No.

桂枝加附子湯

		発汗(悪寒発熱)	鎮痛(頭痛)	鎮痙(頭強)	強壮、健胃
桂枝	3両	散寒解表	気の上衝を治す		行血、辛味・芳香性健胃剤
芍薬	3両		止痛	筋肉の拘攣を治す	補血
甘草	2両		止痛	筋肉の拘攣を治す	補虚益気
生姜	3両	散寒解表			辛味・芳香性健胃剤 鎮嘔
大棗	12枚		鎮静		補気、健胃
炮附子	1枚	冷え、虚脱状態を治す	関節、筋肉の疼痛を治す	関節、筋肉等の拘攣を治す	強壮、利尿

第7条 太陽病、発汗、遂漏不止、其人悪風、小便難、四肢微急、難以屈伸者、桂枝加附子湯、主之。

※遂漏不止 — 発汗剤が強すぎたか、量を過し為に汗が止まらなくなる ⇒ 陰病に転化。

① 4条、5条6条の桂枝湯及び桂枝加葛根湯を分けて其のまさに陰位にゆく者を論ずる。

② 臨床上は麻黄湯を桂枝湯の証を誤診して使用した場合も含む。

※陰病は体内に冷えがあるから本来は小便自利の状態である。

ここでは汗を多く出した為に体液が減少した為 ⇒ 小便難と表現(小便不利とは言わず)

※陰病では附子を加味する。

軽症の陰病 → 炮附子

重症 〃 → 生附子

附子を炮ずると

アコニチン系のアルカロイド(最も毒性強し) —加水分解→ 毒性が低い ベンゾイルアコニン等 —加水分解→ 毒性ほとんどなし アコニン等

炮附子 ① 冷え、虚脱状態を治す。
② 関節、筋肉等の疼痛を治す。

i) 鎮痛作用 — 桂枝、芍薬、甘草と共力。

ii) 鎮痙作用 — 芍薬、甘草と共力。

応用例) 芍薬甘草附子湯。

No.

桂枝去芍薬湯

		発汗(悪寒発熱)	鎮痛(頭痛)	鎮痙(頭強)	強壮、健胃
桂枝	3両	散寒解表	気の上衝を治す		行血、辛味・芳香性健胃剤
甘草	2両		止痛	筋肉の拘攣を治す	補虚益気
生姜	3両	散寒解表			辛味・芳香性健胃剤 鎮嘔
大棗	12枚		鎮静		補気、健胃

第8条 太陽病、下之後、脈促、胸満者、桂枝去芍薬湯、主之。

◎第6条と第7条で桂枝湯にそれぞれ葛根と附子の一味を加えた変方を用いる形をとったので、第8条で芍薬の一味を除いた変方を用いた形を示した条文である。

◎太陽病であれば発汗剤を与えるべきところ、下剤を与えた為(恐らく腹満に似た症状を作った為)、今までにない症状(脈促、胸満)を引起した。

脈促 …… 気の上衝に対応する脈状と考える。

胸満 …… 胸苦しいこと。 満 ⇔ 満(もたい)える ⇔ 悶(もん)と同じ意味

《漢方的病理》考。

太陽病に(まちがって)下剤を与えた ……→ 腹部が空虚になる

⇓

臍下三寸の関元の位置に蔵された気が動揺

⇓

気が上に向って動く(気が上衝する)

⇓

胃の部分で動悸を感じる。(心下悸)

⇓

胸の部分で動悸を強く打つ(心悸)
胸苦しくなる(胸満)

⇓

コメカミの部分で動悸を打つ
顔面が赤くなり、頭痛が起る。

※気の上衝に対して桂枝甘草湯を与える事が治療の基本。

宋板傷寒論「発汗過多、其の人手を叉んで自ら心を冒い、心下悸し、按ずることを得んと欲する者は桂枝甘草湯これを主る」⇒ この場合、客気(外来の邪気)の上衝

傷寒論20条「発汗の後、臍下悸して、奔豚を作さんと欲する者は茯苓桂枝甘草大棗湯これを主る。」⇒ この場合、真気の上衝

No.

※ この際芍薬を使用してもなんらさしつかえが無い。

i) 宋版傷寒論「太陽病、これを下した後、其の気上衝する者は桂枝湯を与えべし」

ii) ひどい偏頭痛の時に桂枝加桂湯を使用。この時も芍薬は桂枝の薬効の邪魔はしない。

※ 生姜と大棗が桂枝甘草湯に加わったこの処方的意味は、胃腸を調え、薬物の吸収を良くする為と考えられる。

桂枝去桂枝加白朮茯苓湯

		発汗（悪寒・発熱）	鎮痛（頭痛）	鎮痙（項強）	強壮健胃	利尿作用
芍薬	3両		止痛	筋肉の拘攣を治す	補血	
甘草	2両		止痛	筋肉の拘攣を治す	補気益気	
生姜	3両	散寒解表			辛味・芳香性健胃鎮嘔	
大棗	12枚		鎮静		補気健胃	
白朮	3両				健胃・鎮吐止下	利尿作用
茯苓	3両		鎮静安神		補益脾胃	利尿作用

第9条　服桂枝湯、或下之後、仍頭項強痛、翕翕発熱、無汗、心下満微痛、小便不利者、桂枝去桂枝加白朮茯苓湯、主之。

◎桂枝湯の中の主要な薬物を除くことにより、桂枝湯の変方（去加方）のつくり方と、症状のとらえ方を教えている条文。

◎太陽温病の治療剤の一つを教えている。

無汗（汗が出ない）
悪風・悪寒にも言及がない
⇒ 温病。

◎無汗、心下満微痛、小便不利 ⟶ 停飲（胃内停水）が原因で各種の症状を引起こす ⇒ 茯苓、白朮を加える。

太陽温病の治療剤である五苓散（沢瀉、猪苓、茯苓、白朮、桂枝）を用いないのは小便不利にして煩渇に至ってない為。つまりまだ悪熱が強くない時にこの処方を用いている。

※仍（なお）……依然としてという意味。

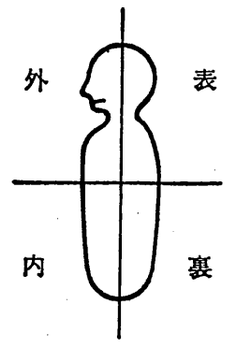
※心下 …… 一般的には「みずおち」のあたりをお指す。直腹筋と肋骨弓の交点附近までの範囲。

※陽虚のときに利水剤のほかに桂枝を入れるのは、血液循環を促進して利尿効果を強める為である（exp. 五苓散）。
これがいわゆる「気を行らせて水を化す」「気行れば水行る」の意味でもある。

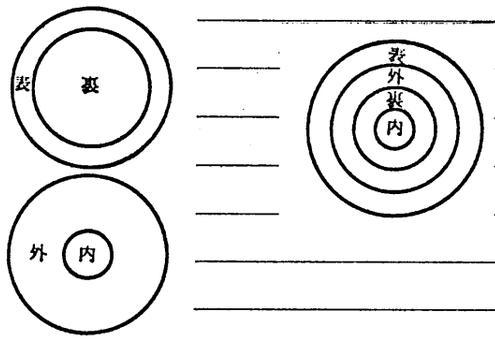
No.

長沢元夫説

① 表裏内外の区別

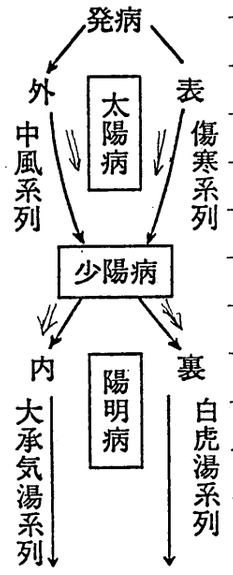


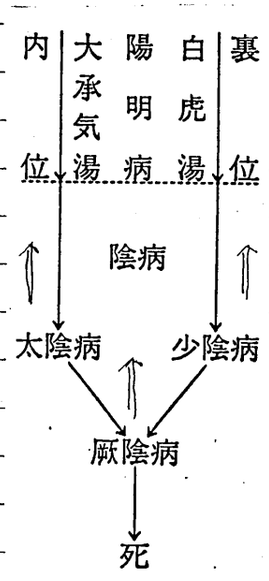
〈長沢説〉

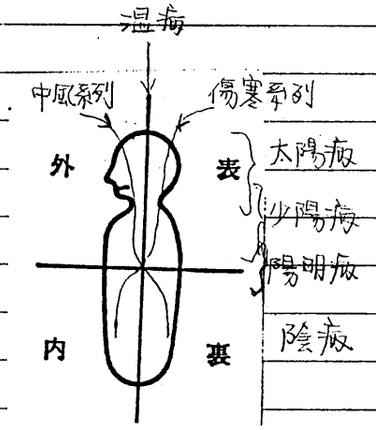


〈従来の考え方〉

② 傷寒論での傷寒、中風のとらえ方







⇒ 病状のおよぼす方向性

No.

白虎加人参湯

		解熱作用	口渇を止める	胃腸を保護	
石膏	1片	寒熱に使用し温熱病の主薬	○		
知母	6両	寒熱、虚熱のどちらにも有効	○		
甘草	炙2両			○	
粳米	6合	○	○	○	
人参	2両			補脾健胃	滋養強壮作用

第10条　服桂枝湯、不汗出後、大煩渇不解、脈洪大者、白虎加人参湯、主之。

※ 不汗出は発汗剤を服用しても汗の出ない事をいう。（汗不出は無汗と同じ意、実際的に汗が出ていない）

つまり桂枝湯を服用してもといっているので ⇒ 桂枝湯は発汗剤とみている証明。

※ 麻黄湯証（中風系列）や葛根湯証（傷寒系列）の人では発汗力が弱すぎる為に汗が出ない。

⇓

しかしここでは温病に用いたので当然発汗しない事を述べる為。

⇓

「大いに煩渇して解せず」と言っている

口渇が甚しいのは漢方病理学的に考えると

① 体液（対津液）が著しく減少したとき
② 裏熱があるとき（腎、膀胱系）

ここでは裏熱によるものと考えられる ⇒ 即ち陽明病になったと判断される。

それを確認する為に脈を調べると洪大（大きい）であったので間違いないと結論して、白虎加人参湯の適応症と言ったのである。

※「不汗出」は宋板、康平本でも「大汗出」となっている。

桂枝湯の様な穏やかな薬を用いても大量の発汗があるほどの患者は相当な虚証であるから脈が洪大になる筈がない ⇒ 故に大いに汗が出た後で白虎加人参湯を与えることが出来ない。「大汗出」は誤写によるものと思われる。

※ 陽明の部位 …… 腹部をさす。

内 …… 消化管
裏 …… 腎、膀胱系

No.

第42条 傷寒、下後不解、熱結在裏、表裏但熱、時時悪風、大渇、舌上乾燥而煩、欲飲水数升者、白虎加人参湯、主之。
石膏 1片碎、知母6両、甘草2両炙、粳米6合、人参2両。右五味以水1斗煮、米熟湯成、去滓、温脈一升。

※ 第41条の状態から出発して ①体力が劣える方向に進展する場合(42条、43条)
②症状が激しくなる方向に進展する場合(47条)の具体的症状をました条文。

※ 下した後解せず、熱邪が裏(腎・膀胱系)にかたくとりついて、表にも裏にも熱感があるだけで、悪感も裏寒もなく、ただ時たま、腎臓のうしろの背中の部分に悪風ないし悪寒を生じ(腎の逆症によって生じた症状)、大いに渇し(裏熱のある時現われる症状)舌が乾燥してものすごく煩す(小便快利して津液の減少と裏熱からの口渇がかさなって)、数合の水を飲みたくなる。それを飲んでも皆小便に排泄されるだけで口渇は止まらない。そして体力はその為急速に落ちてしまう。それで裏熱に対する白虎湯に人参を加味したものを使用す。

第43条 傷寒、無大熱、口煩渇、心煩、背微悪寒者、白虎加人参湯、主之。

※ 無大熱 ⇒ 第18条、第19条と同じ。身に大熱はないが身熱がある。これは裏熱によって起った症状。

※ 口煩渇 ⇒ 第16条の煩燥の煩と同じく甚だしいこと。つまり口渇が甚だしいこと。これも裏熱によって起った症状。

※ 心煩 ⇒ 胸苦しいこと

※ 背微悪寒 …… 前条の時時悪風がどこに寒けを感ずるか明記せず、あいまいにしているのに対し、ここでは背に感ずると明記してあるのは、腎の逆症が一層進行したことを示している。悪風を悪感と言いかえている事がそれを示す。
この病気の進行は体力の減退を伴っているから、熱症状に関しては軽くなっているが、寒症状については重くなっている。それを背微悪寒と表現したのである。

No.

甘草乾姜湯

		裏寒を除く		
甘草	4両	甘温	気を下す(健脾養心)	鎮痛・鎮痙
乾姜	3両	健胃作用による胃腸の温暖感	鎮嘔作用	

第11条 傷寒、脈浮、自汗出、小便数、心煩、微悪寒、脚攣急。反服桂枝湯。得之便厥、咽中乾、煩躁吐逆者、与甘草乾姜湯、以復其陽。若厥愈者、与芍薬甘草湯、以其脚伸。若胃気不和、讝語者、与調胃承気湯。若重発汗者、四逆湯主之。
甘草四両炙、乾姜三両。右二味、以水三升煮、取一升二合、去滓、分温再服。

※ 脈浮は陽病を示すも、発熱に言及なし。また陽病であれば脈緊数(つく)でなければならない。
陰病と断定するには脈は浮緩弱でなければならない。
太陽病の傷寒は無汗である(第3条より)。自汗出とある為、これは太陽病傷寒ではない。
小便数 …… からだの内部が冷えて、普通の少陰病では小便がたびたび出る。
第7条の小便難は陰病にもかかわらず、発汗剤を与えた為、汗が止まらず出てしまった為に体液が減少して小便難になった。
つまり脈が本来の沈でない理由は太陽病から少陰病に移る中間の状態と考えられる。
第4条太陽中風「陰弱なる者は汗自ら出で、淋淋として悪風し、鼻鳴り、乾嘔する者は桂枝湯これを主る」とよく似たところがあるので誤治して桂枝湯を服したのである。
本当はここでは桂枝加附子湯を与えるのが正解。

※ 便厥 …… (誤治で桂枝湯を服した)その為に、手足が逆冷(先の方から冷くなる)した。厥冷、厥逆と同じ
これは陰病の中でも悪質な症状の一つ
咽中乾 …… 体液が減少した為に起る症状、のどがカラカラに乾くこと。
これに対して煩渇、口渇は裏熱によって起る症状。
煩躁 …… 手足をしきりに動かして全身でもしむ状態。
①熱症状を伴うので陽病の甚だしい場合
②陰病の末期にも現われる症状。
吐逆 …… (下からこみ上げてくる様な)腹の方からむかむかと吐くこと。
つまり陰病で嘔吐するときに、熱性の薬物で鎮嘔作用の強い乾姜と、急迫を治し、気を下し、温める作用のある甘草を併用すると、寒冷を去って陰に傾いていた

No.

痛状を（陽が軽くなっている）回復させる。これが「以って其の陽を復す」という表現。つまり陽気を回復せしめれば陰陽のバランスが調う。素問や神農本草経に於ける原則と全く同じ。

No.

芍薬甘草湯

		鎮痙作用	鎮痛作用	
芍薬	3両	筋肉の拘攣を治す	止痛	補血
甘草	3両	~~鎮痛~~ 鎮痙	止痛	補脾益気

攣急を緩める。

第11条 傷寒、脈浮、自汗出、小便数、心煩、微悪寒、脚攣急。反服桂枝湯。得之便厥、咽中乾、煩躁吐逆者、与甘草乾姜湯、以復其陽。若厥愈者、与芍薬甘草湯、以其脚伸。若胃気不和、譫語者、与調胃承気湯。若重発汗者、四逆湯主之。

甘草四両炙、乾姜二両。右二味、以水三升煮、取一升二合、去滓分温再服。

芍薬二両、甘草三両炙。右二味、以水三升煮、取一升二合、去滓、分温三服。

※甘草乾姜湯を与えて手足の冷えと悪寒が治っても、脚の攣急が残っているから、芍薬甘湯を与え

芍草と甘草の鎮痛鎮痙作用の相乗作用により、下肢の筋肉のひきつれが治り、下肢が伸びる

※その他の応用。

- 胃痙攣。
- 胆石で腹直筋がつっぱり、手足まで痛んでひきつれる時。
- 腎結石・膀胱結石等の発作時、腹筋が緊張して腹痛が激しく、足がひきって痛む時の頓服。
- 四肢の疼痛、神経痛で下肢の筋肉のひきつる様な時。

※炙甘草 ⇒ ①胃寒・血虚・陰虚に対して補益薬に配合して使用。
②薬性を調和するとき。
} 補中益気の効能が強い

生甘草 ⇒ 炎症・化膿症・湿疹・感冒・発熱・乾咳などに用う。
清熱解毒の力が強い。

No.

調胃承気湯

大黄	4両	植物性下剤	
甘草	2両		
芒消	半斤	塩類性下剤	

第11条 傷寒、脈浮、自汗出、小便数、心煩、微悪寒、脚攣急。反服桂枝湯。得之便厥、咽中乾、煩躁吐逆者、与甘草乾姜湯、以復其陽。若厥愈者、与芍薬甘草湯、以其脚伸。若胃気不和、譫語者、与調胃承気湯。若重発汗者、四逆湯主之。

※胃気不和とは

邪熱が胃に入った為に { ① 食欲のなくなる場合 / ② むやみに食べる場合 }

⇓

この邪熱が腸に入るとうわごと(譫語)をいう様になる。

従って消化管に邪熱が入った場合は下剤をかけることにより自然治癒力が発動。
(昔から小児の発熱で浣腸をかけて治癒させるのも同じ様な原理?)

処方名も胃を調えて気を承(たすく)けるとなっていて便秘を治すという表現はない。
しかし、うわごとを言う時は便秘をしていることが常で、脈診や熱状によってそれを推定する。

No.

第23条 発汗若下之後、反悪寒者、虚也。芍薬甘草附子湯、主之。但熱者、実也。与調胃承気湯。 芍薬三両、甘草三両炙、附子一枚炮去皮破八片。右三味、以水五斤、煮取一斤五合、去滓、分服三服。 大黄四両酒洗、甘草二両炙、芒消半斤。右三味以三斤、煮取一斤、去滓、内芒消、更煮両沸、頼服。

※この条文は 太陽病の(+,−)型から

前段は(−,−)即ち少陰病へ移行
かえって悪寒する者
熱感のないことを意味している(−,−)
陰病に変ったので桂枝の代りに附子を使用

後段は(+,+)即ち温病へ移行
但熱する者
悪寒がなく熱感だけ(+,+)

※但熱者、実也。
悪寒がなく(+)熱感だけ(+)の者、すなわち、傷寒や中風とは異なった、温病タイプを表わしている。それを病邪が実(いっぱいつまる意)になったと表現している。
ここでは陽明病の入口に病状がきていることを推定。即ち太陽温病の中期にすでにこの処方を使用すること。

No.

四逆湯

		祛寒作用	
甘草	2両	甘温	附子・乾姜の毒性を弱める
乾姜	1両半	使用作用による胃腸の温暖感	附子の毒性を弱める
附子	1枚	熱薬	

第11条 傷寒、脈浮、自汗出、小便数、心煩、微悪寒、脚攣急。
反服桂枝湯。得之便厥、咽中乾、煩躁吐逆者、与甘草乾姜湯、
以復其陽。若厥愈者、与芍薬甘草湯、以其脚伸。若胃気不和、
譫語者、与調胃承気湯。若重発汗者、四逆湯主之。

※ 若重発汗者

一度発汗剤である桂枝湯を与えて、咽中乾、煩躁という陽症に似た症状が、あらわれたので、それを陽症だとさらに誤認して、もう一度発汗剤を与えたので、一度目の誤治で少陰病になったのが、二度目の誤治ではそれよりひどい厥陰病にまで症状がすすんだことになる。従って四逆湯を与えることになる。

※ 四逆湯は甘草乾姜湯の量を半分にして、熱薬の附子を一個を加えたもの。
乾姜と附子の組合せに意味がある。その際炮附子でなく生附子を用いている。

『附子は走(ゆ)きて守らず、よく走(ゆ)きよく守る』

"走"とは作用部位が広いこと、"守"とは作用部位が限局しているが効果が持続的なこと。

乾姜は全身の血液循環を促進するが、主として温中散寒により胃腸に作用し効力は強く持続性がある。

附子は大熱で、強い作用が強く、全身に作用するが、効果が早く、持続性がない。

『乾姜は附子なくば熱せず』

乾姜と附子を配合すると相乗効果により回陽救逆、温中散寒、止痛の効能が増強する。(※胃腸に温暖感を与える) また乾姜は附子の毒性を弱める。

乾姜は胃に対する刺激性があるので、補益剤に使用するときは甘草・大棗と配合して刺激をやわらげる必要がある。

No.

第62条 小陰病、脈沈者、宜四逆湯。
甘草二両炙、乾姜一両半、附子一枚生用去皮破八片。右三味、
以水三升煮、取一升二合、去滓、分温再服。

※ この条文は厥陰病の症状をのべた第60条(通脈四逆湯)の後に位置している関係から厥陰病の治療を論じたものと考えられる。

少陰病は生命力がかなり減退している為、裏位の病邪が内位へ、外位へ、表位へと影響を与えやすい状態になっている。従って病位面からみると少陰病の激症(変証)は厥陰病と同じであり、緩急の相違しかない為、厥陰病を少陰病篇に入れて、論じていると思われる。

また脈沈であるから、第60条の脈微欲絶ほど変化していない事がわかるし、少陰病の第54条(附子湯)の脈沈と同じだから、この条文は厥陰病の軽症を述べているものと思われる。これは第47条(白虎湯)で陽明裏位の激症(三陽合病)を詳細にした時、第41条(白虎湯)はその軽症だから抽象的に簡単に表現されているのと同じ関係となっている。

No.

葛根湯

	発汗作用(悪寒、発熱)	鎮痛(頭痛)	鎮痙(項強)		
葛根	四両	散邪解表		筋肉、特に肩こりを治す	
麻黄	三両	発汗解表	○	○	鎮咳
桂枝	二両	散寒解表	気の上衝を治す		行血 辛味・芳香性健胃
芍薬	二両		止痛	筋肉の痙攣を治す	補血
甘草	二両		止痛	筋肉の痙攣を治す	補虚益気
生姜	三両	散寒解表			辛味・芳香性健胃 鎮吐
大棗	十二枚		鎮静		補気・健胃

第31条 太陽病、項背強几几、無汗、悪風者、葛根湯、主之。
葛根四両、麻黄三両去節、桂枝二両去皮、芍薬二両、甘草二両炙、
生姜三両切、大棗十二枚擘。右七味、以水一斗、先煮葛根麻黄、
減二升、去白沫、内諸薬、煮取三升、去滓、温服一升。

※ 第6条(桂枝加葛根湯)と二句目までは同じである事から、この条文は太陽傷寒列を述べたものである。それは悪風とある事から傷寒は(十、一)の型である事を示す。無汗の状態は汗出より症状はさらに重い。それで第6条より陽病の性格が強くなっているから、桂枝加葛根湯に麻黄を加えて、発汗作用を強くした葛根湯を使う。

※ ここで第6条の様に桂枝加葛根麻黄湯としないのは、第9条までは桂枝湯を基準にしてその去加方をつくる諸例を示してきたが、第31条からは処方中の主薬を先に置いた為。第6条でも主薬は葛根であるが、桂枝湯の去加方の型を示す為葛根を一番終りに置いている。

※ 桂枝湯などより桂枝、芍薬の量が一両少いのは、葛根、麻黄が加わった為で(相乗作用により発汗作用が強化された)桂枝湯のごとく三両にしてもよい。

No.

第13条 太陽与陽明合病者、必自下利、葛根湯主之。

※ 併病と合病
併病 ～ 病邪が移動している状態(ex. 太陽病→少陽病→陽明病)
以前に生じた症状に従って薬物を加味することになる。
合病 ～ 激症のために一種の反射現象を起した状態。
(ex. 太陽病→陽明病、少陽病→太陽病、陽明病→太陽病)
病邪の位置は移動していない為、薬物を加味せず、本源をたたく方法を用う。

※「太陽と陽明の合病」
太陽傷寒の激症で少陽を通り越して、直接陽明位に反射現象的影響を与えた為に下痢を起した場合を言っている。

No.

葛根加半夏湯

		鎮咳・健胃		発汗	鎮痛	
葛根	4両			散熱解表	有効と記す	
麻黄	3両			発汗解表	○	鎮咳
桂枝	2両	辛味・芳香性健胃		散寒解表		
芍薬	2両		鎮痙		止痛	
甘草	2両		鎮痙		止痛	
大棗	12枚	健胃			鎮静	
生姜	3両	鎮嘔 辛味・芳香性健胃		散寒解表		粗の毒性を減じる
半夏	半升	制吐			鎮静	粘液

第14条 太陽与陽明合病、不下利、但嘔者、葛根加半夏湯主之。
葛根4両、麻黄三両去節、桂枝二両去皮、芍薬二両、甘草二両炙、
大棗十二枚擘、生姜二両切、半夏半升洗。右八味、以水一斗、先煮
葛根麻黄、減二升、去白沫、内諸薬、煮取二升、去滓、温服一升。

※ 第13条(葛根湯)は合病の下に「者」があるが、第14条では「不下利但嘔」の下にあるところから
第13条は合病の正証であり、第14条はその変証であることを示している。
※ 太陽病の激症であるから、陽明に影響を与える(この場合腹満が考えられる)と同時に、
ふだん痰飲(胃内停水)のある者には少陽にすぐ影響をなえて嘔を引き起す。
これは太陽→少陽という順な方向に病邪が移行する場合となり太陽と少陽
の併病と考えられ、嘔を治すために、半夏を加味する。生姜と半夏の相乗作用により
鎮嘔作用が強化する。これは、葛根湯と生姜半夏湯の合方した事と同じになる。
※ 下痢がないのに陽明病という根拠は腹満を推定する。
『但嘔者』の但は"もっぱら"という意味の副詞として使用されていて、"嘔しかない"と
解釈すると困難で、"主な症状としては嘔しかない"と解釈する。それで、他に腹満と
いう症状がかくされている。
依って{宋板や康治本では特に康治本では併病という語は用いていない。}
太陽→少陽の症状は併病に属するから、これを除くと、太陽と陽明の合病となり、
この第14条の記述と一致する。

No.

麻黄湯

		発汗・解熱	鎮痛	鎮咳	利尿
麻黄	3両	発汗解表	○	エフェドリン	○
桂枝	2両	散寒解表	○		○
甘草	2両		○	グリチルリチン	
杏仁	70箇	○		アミグダリン配糖体	○

第15条 太陽病、頭痛発熱、身疼腰痛、骨節疼痛、悪風無汗、
而喘者、麻黄湯主之。
麻黄3両去節、桂枝二両去皮、甘草二両炙、杏仁七十箇去皮尖。
右四味、以水九升、先煮麻黄、減二升、去上沫、内諸薬、煮取
二升半、去滓、温服八合。

※「太陽病、頭痛発熱」までが第6条(桂枝湯)と同じである事から、この条は第6条と
互文をなし、太陽中風の系列に属することがわかる。
※「身疼腰痛、骨節疼痛」は第3条の体痛をここで詳しく言っている条文である。
つまり熱邪と水毒によってこれらの症状が起る。
※「而喘」
病状がひどくなると喘(あえぐこと、短い息づかい)するようになる者と解釈。
この状態は太陽と少陽の併病になった事を意味する。
※ 桂枝湯や葛根湯のように生姜と大棗を加えない理由は、恐らく胃腸障害
を起さないからと思われる。それらを加えても作用は変ることにはならない。
宋板傷寒論では桂枝二麻黄湯、桂枝麻黄各半湯が収載されている。
麻黄湯とこの両処方との証のちがいは薬用量の相違。

No.

青竜湯（大青竜湯）

		発汗・解熱	鎮痛	鎮咳	利尿	健胃作用
麻黄	6両	発汗解表	○	エフェドリン	○	
桂枝	2両	散寒解表	○		○	辛味・芳香性健胃
甘草	2両		○	グリチルリチン		補虚益気
杏仁	40箇	○		アラダグリン成分	○	
生姜	3両	外感同寒				辛味・芳香性健胃
大棗	12枚		鎮静		○	補気・健胃
石膏	鶏子大	裏熱を除く				

第16条 太陽中風、脈浮緊、発熱悪寒、身疼痛、不汗出、而煩躁者、青竜湯、主之。

麻黄六両去節、桂枝二両去皮、甘草二両炙、杏仁四十箇去皮尖、生姜三両切、大棗十二枚擘、石膏如鶏子大碎。右七味、以水九升先煮、麻黄、減二升、去上沫、内諸薬煮、取三升、去滓、温服一升。

※ この第16条は第5条（桂枝湯）にはじまる太陽病の進展を論じた最後の条文。

※「脈浮緊」～第3条の「太陽病……脈陰陽俱緊者、名曰傷寒」と第16条の太陽中風とは相違している。つまり第4条の太陽中風とこの条文が関係を持たず、ここでの太陽中風は中風系列という意味でとらなければならない。

※ またこの条文は麻黄湯証の激症にあたるので、ひどい頭痛を伴うにもかかわらず、頭痛、発熱という句を用いず、「発熱悪寒」という句で示し、第15条では悪風と表現している。

※「不汗出」～第10条と同じく発汗剤を服用しても汗が出ない意。ここでは麻黄湯を服用しても発汗しないこと。

※「而煩躁」～第15条の「而喘」と同じように、病状がさらに進行すると煩躁すると解釈す。病邪が激しいために陽明の裏位に影響を及ぼし、その裏熱によって煩躁という症状が生じたと見てとる。従って裏熱を除く為に石膏を加味している。鶏子大の石膏を用いる為胃をそこなうので、生姜、大棗を加えてある。

麻黄湯よりも麻黄を多量に用いて発汗解熱作用を強力にしている。さらに桂枝と生姜が共力して麻黄の発汗作用を強和し、大棗は利尿作用を強めている。

No.

第17条 傷寒、脈浮緩、身不疼、但重、乍有軽時、無少陰証者、青竜湯、発之。

※ 第17条から第25条（真武湯）までは太陽病からはじまる変証を論ずる。

これは第11条の傷寒、脈浮、自汗出、小便数……というのと同じ使い方。つまり習慣問題。

※「発之」～ヒントを与える為に最後に「発之」という句をつける。

金匱要略の「溢飲を病む者は、当に其の汗を発すべし。大青竜湯これを主る、小青竜湯亦これを主る」という条文の発と同じく、水毒を発汗することによって溢飲を除去することを暗示させている。

※「身重」という症状は、

陽明病
少陰病
水毒が多い時
に発現する

金匱要略の痰飲欬嗽病篇には

「飲水流行して四肢に帰するは当に汗出ずるべくして汗に出でず、身体疼重するは、これを溢飲と謂う」

「但重」～ただいからだ身が重い症状だけがはっきりしている

※「無少陰証者」～少陰病であるならば発熱せず悪寒し、また自汗出ずる筈である。

これが確認できないので少陰の証なき者と表現した。

その為、水毒による身重がはっきりしたので青竜湯を用いて発汗させるのである。

少陰病に似ているから注意せよという意味

少陰病に移行する可能性が大いにあることもます。

No.

桂枝二麻黄一湯

		桂枝湯	麻黄湯
桂枝	一両17銖	○	
芍薬	一両6銖	○	○
麻黄	16銖		○
生姜	一両6銖	○	
杏仁	16箇		○
甘草	一両2銖	○	○
大棗	5枚	○	

第25条 服桂枝湯。大汗出。脈洪大者。與桂枝湯如前法。若形如瘧。一日再発者。汗出必解。宜桂枝二麻黄一湯。

桂枝一両十七銖去皮 芍薬一両六銖 麻黄十六銖去節 生姜一両六銖切 杏仁十六箇去皮尖 甘草一両二銖炙 大棗五枚擘 右七味。以水五升。先煮麻黄一二沸。去上沫。内諸薬。煮取二升去滓。温服一升。日再服。本云桂枝湯二分。麻黄湯一分。合為二升。分再服。今合為一方。将息如前法。

桂枝湯を服用して、大いに発汗して脈洪大を現す者がある。しかし陽明の症がまだ発現していなければ、たとえ脈が洪大であっても、治えとして桂枝湯を与える。もし、形瘧（一定時に発熱をくりかえす事）の如く、一日に再発する者は汗出すれば必ず解す。この様な場合、桂枝湯二分、麻黄湯一分を合方した桂枝二麻黄一湯を使うと宜し。

No.

桂枝麻黄各半湯（桂麻各半湯）

	局方		桂枝湯	麻黄湯
桂枝	35g	両16銖	○	
芍薬	20g	一両	○	○
生姜	10g	一両	○	
甘草	20g	一両	○	○
麻黄	20g	一両		○
大棗	20g	4枚	○	
杏仁	25g	24枚		○

校正傷寒論（浅野元甫）の辨太陽病脈證並治法上第五 より

第23条 太陽病。得之八九日。如瘧状。発熱悪寒。熱多寒少。其人不嘔。清便欲自可。一日二三度発。脈微緩者。為欲愈也。脈微而悪寒者。此陰陽俱虚。不可更発汗更下更吐也。面色反有熱色者。未欲解也。以其不能得小汗出。身必痒。宜桂枝麻黄各半湯。

桂枝一両十六銖去皮 芍薬 生姜切 甘草炙 麻黄各一両去節 大棗四枚擘 杏仁二十四枚湯浸去皮尖及両仁者 右七味。以水五升。先煮麻黄一二沸。去上沫。内諸薬 煮取一升八合。去滓。温服六合。本云桂枝湯三合 麻黄湯三合。併為六合。頓服。将息如上法。

隔日または毎日一定時間に発熱すること。

太陽病になってから8.9日経過した。普通からは少陽病あるいは陽明病になるべきだ。ここではまだ太陽病の時期を離れず、熱候は瘧の如くで、発熱悪寒し、しかし熱症の方が多く寒症の方が少ない。嘔することがないので少陽でなく、大便も順調であるから陽明でもない。この様な病状で脈が微緩なる者は病勢が即に消退しつつある者で治療するに及ばない。しかし脈が微であっても悪寒する者は陰陽ともに虚して精力が正常以下に消耗しているから、更に汗吐下等の攻撃的治法を用いてはならない。もし陽明でもないのに顔面が熱を帯びて赤くなった者はまだ病が治ろうとはしていない。この様な時は発汗が少し不足しているので少ず痒の症（かゆみ）がある。これに対する治方として桂枝麻黄各半湯が適当である。すなわち、この病症は少く発汗させればよく、この場合桂枝湯

No.

小青竜湯

		発汗・解熱	鎮痛	鎮咳	利尿	
麻黄	3両	○	○	○	○	
芍薬	3両		○			
細辛	3両	○	○	表飲による咳嗽		
乾姜	3両	○		○		健胃・止嘔
甘草	3両		○	○		
桂枝	3両	○	○		○	芳香性健胃
五味子	半升			○		
半夏	半升		鎮静	祛痰		制吐

宋板傷寒論

中40条 傷寒。表不解。心下有水気。乾嘔発熱而咳。或渇。或利。或噎。或小便不利。少腹満。或喘者。小青竜湯主之。
麻黄去節。芍薬。細辛。乾姜。甘草炙。桂枝各三両去皮。五味子半升。半夏半升洗右八味。以水一斗。先煮麻黄減二升。去上沫。内諸薬。煮取三升去滓。温服一升。若渇者。去半夏。加括楼根三両。若微利。去麻黄。加蒿花如一鶏子。熬令赤色。若噎者。去麻黄。加茯苓四両。若喘者。去麻黄。加杏仁半升。去皮尖。且蒿花不治利。麻黄主喘。今此証反之。疑非仲景意。

※「乾嘔」～嘔吐のみあって物の出ないこと。
※「噎」～咽喉がつまった感じがあって、嚥下した飲食物が胃に納らず中途から逆上すること

中41条 傷寒。心下有水気。咳而微喘。発熱不渇。服湯已渇者。此寒去欲解也。小青竜湯主之。

No.

銀翹散（金銀翹解毒片）

	中国薬	解熱作用	消炎作用（咽喉痛）	利尿作用	
金銀花	12g	○		○	
連翹	9g	○		○	
荊芥	9g	○	○		
淡豆鼓	9g	○			健胃・消化
牛蒡子	9g	○	○祛痰・咳	○	便通作用
桔梗	6g		○祛痰・狂味		
薄荷	3g	○	○		健胃・芳香
淡竹葉	9g	○		○	
芦根	18g	○			胃腸のかんか
甘草	3g		○		健胃.

『温病条辨』より処方出典.

感冒や感染性疾患の初期で、発熱・軽度の悪風や悪寒・頭痛・咽喉痛などの風熱表証があるときは、金銀花・連翹・荊芥・淡豆豉などを配合して清熱解毒と疏風解表を同時に行なう。
古人は経験的に「咽痛には必ず荊芥を用いる」としている。
特に荊芥に桔梗・生甘草を配合すると消炎作用が強まる。

No.

桑菊飲

	中医名	解熱作用	消炎作用（咽喉痛）	利尿作用
桑葉	9g	○	○ 抗菌吸収	
菊花	9g		○	○
杏仁	9g		○ 抗菌吸収	○
連翹	12g	○		○
薄荷	3g	○	○	
桔梗	6g		○ 抗菌鎮咳	
生甘草	3g		○	
芦根	18g	○		

『温病条辨』より処方出典

○軽度の発熱・咳嗽・眼の充血（感冒などによる）に使用。

○温病条辨（呉 鞠通）による太陽温病の基本治療剤の整理

- 辛涼軽剤 ⇒桑菊飲
- 辛涼平剤 ⇒銀翹散
- 辛涼重剤 ⇒白虎湯

この整理の仕方を太陽中風・太陽傷寒にあてはめると、

	太陽中風	太陽傷寒
辛温軽剤 ⇒	桂枝湯	桂枝加葛根湯
辛温平剤 ⇒	麻黄湯	葛根湯
辛温重剤 ⇒	青竜湯	葛根湯（合病）

No.

乾姜附子湯

乾姜	一両半	温裏作用 四逆湯等を加える	附子の副作用を減ず
附子	一枚	表に 除痛と利水除く	

第18条 発汗、若下之後、昼日煩躁、不得眠、夜而安静、不嘔、不渇、脈沈微、身無大熱者、乾姜附子湯、主之。

乾姜一両半、附子一枚生用去皮破八片。右二味、以水三升煮、取一升二合、分温服、再服。

※「発汗、若下之後」 ～ たとえば汗を出させたり、あるいは下したりという治法をした後で、今までの状態とすっかり違った状態になった事を示す。それが「変」という表現になっている。

※「昼日煩躁、不得眠」 ～ ひるま煩躁（手足をしきりに動かして、全身で苦しみもだえる）して眠れない。

第11条（甘草乾姜湯）の陰痙の場合 } 煩躁 ここでは 厥（手足の冷え）がない…陰証 / 無汗でない …陽痙 } どちらもさそうれない。
第18条（青竜湯）の陽痙の場合 }

※「夜而安静、不嘔、不渇」

ところが夜になると安静になってしまう。また昼間は嘔や渇があったが、夜になるとそれもなくなる。

嘔は少陽の症状、
渇は裏熱（陽明）の症状 } とみれば陽証になる。

第11条の「咽中乾、吐逆」の陣に体液の欠乏による陰痙とする事もできる

これを弁別する為には脈診による事になる。

※「脈沈微」という事により陰痙であることが確認される。

※身熱（微熱）があっても陰痙と見てよいという事を「身に大熱なし」と表現す。

※結局、この状態は厥陰痙である為、乾姜附子湯をえている

ここでは四逆湯用いてもよかり。

ここでは急迫時に用いる甘草がはずせも必要でなく、第11条（甘草乾姜湯）の乾姜より半分の量であり陰証を確実に処理するために附子を必要としている。

No.

麻黄甘草杏仁石膏湯（麻杏甘石湯）

		喘を治す		利尿作用
麻黄	4両	○		○
甘草	2両	○		
杏仁	50箇	○		○
石膏	半斤		裏熱を除く	

第19条 発汗後、汗出而喘、無大熱者、麻黄甘草杏仁石膏湯、主之。
麻黄四両去節、甘草二両炙、杏仁五十箇去皮尖、石膏半斤砕。右四味、以水九升、先煮麻黄、減二升、去上沫、内諸薬、煮取二升、去滓、温服一升。

※「発汗後」～第18条の「発汗若下之後」と同じ。次の汗出を解釈しやすい様に「若下之」を省略。

※「汗出」～後という語により、いままでの状態からすっかり変り、太陽病の症状でなく陽明病の症状による汗出を示す。

陽明病の熱邪による汗出 ① 承気湯類を使用（内位）
② 白虎湯類を使用（裏位）

ここでは「而喘」とあることから水毒が関与しているので、裏位の熱邪によるものという判断。

※「無大熱」～第18条と同じく、身熱、または微熱のあること。これによっても裏位によるもの判定。

※裏熱を除くには石膏を必要とす。→ 裏熱による汗出を治す作用を石膏は持っている。

外台秘要巻14　深邱、療柔風、体疼、自汗出、石膏散方。
石膏二両研、甘草一両炙。

外台秘要巻15　延年、療風虚、止汗、石膏散方。
石膏研、甘草炙各四分。

※この処方の場合 麻黄の発汗作用は桂枝がないので強く現われない。

No.

甘草麻黄湯（麻黄20 甘草10）
裏水の治療に用いる。

麻黄湯（麻黄3両 桂枝2両 甘草2両 杏仁70箇）

大青竜湯（麻黄6両 桂枝2両 甘草2両 杏仁40箇 生姜3両 大棗10枚 石膏鶏大）
発汗作用を強める為麻黄の量が多い。（麻黄、桂枝、石膏の三者が組合さって発汗作用が強くなるのでもない）

麻杏甘石湯（麻黄4両 甘草2両 杏仁50箇 石膏半斤）
石膏そのものに止汗作用。麻黄と甘草で裏水を除くので止汗の効果あり。

越婢湯（麻黄9 石膏12 生姜4.5 大棗6 甘草3）

越婢加朮湯（麻黄9 石膏12 生姜4.5 大棗6 甘草3 白朮6）
白朮を入れて利尿作用を強くした。

桂枝二越婢一湯（桂枝18銖 芍薬18銖 麻黄18銖 甘草18銖 大棗4枚 生姜2両 石膏24銖）
麻黄、桂枝、石膏が配合されていても、麻黄の量が少いので発汗作用は強くない。

No.

茯苓桂枝甘草大棗湯（苓桂甘棗湯）

		鎮静作用
茯苓	半斤	○
桂枝	3両	○
甘草	2両	○
大棗	15枚	○

→ 強い鎮静作用を有す
→ 気の上衝を除す鎮静作用とする

第20条 発汗後、臍下悸、欲作奔豚者、茯苓桂枝甘草大棗湯、主之。
茯苓半斤、桂枝三両去皮、甘草二両炙、大棗15枚擘。右四味、以甘爛水一斤、先煮茯苓、減二升、内諸薬、煮取三升、去滓、温服一升。

※「臍下悸」～気が小腹より上って心胸を衝くこと。

※「欲作奔豚」

金匱要略「師曰く、奔豚の病は小腹より起り上って咽喉を衝き、発作すれば死せんと欲し、復還りて止む。皆驚恐より之を得」

発作性心悸亢進、ヒステリー、ある種の狭心症おもうこと。

※つまりここでは気が上衝を起そうとしている状態であるから鎮静剤を与える。
桂枝甘草湯と同じ性格の処方。

- 桂枝甘草湯（桂枝4両、甘草2両）
  宋板「発汗過多、其の人手を叉んで自らおを冒い、心下悸し按ずることを得んと欲する者は桂枝甘草湯これを主る」 つまり外来の邪気が上衝して、この様な症状を呈す。
- 桂枝湯（桂枝3両、芍薬3両、甘草2両、生姜3両、大棗12枚）
  宋板「太陽病、これを下して後、其れ気上衝する者は桂枝湯を与うべし」
- 桂枝加桂湯（桂枝5両、芍薬3両、甘草2両、生姜3両、大棗12枚）
  桂枝の量を多くし、いわゆる偏頭痛とる。

従って苓桂甘棗湯でも分量を多くすれば他の処方と同じに用いる事ができると思われる。

⇒ 桂枝の分量に関係

No.

茯苓桂枝甘草白朮湯（苓桂朮甘湯）

			胃内停水を除く	
茯苓	4両	鎮静作用	利尿作用	脾胃を強健にする
桂枝	3両	気の上衝を下げる（鎮静）		末梢血管拡張剤
甘草	2両			辛味性健胃剤
白朮	2両	（鎮静作用）	利尿作用	健胃作用

→ 茯苓に桂枝を加えると血液循環を促進して利尿効果を強める。

第21条 発汗若下之後、心下逆満、気上衝胸、起則頭眩者、
茯苓桂枝甘草白朮湯、主之。 茯苓四両、桂枝三両去皮、甘草二両炙、白朮二両。右四味、以水一斗、煮、三升、去滓、温服一升。

※この条文は気が上衝するときの一つの変証を述べたもの。

※「心下逆満」～胃部（心下）が重苦しくて、下から押し上げられる感じをいう。
これは普段胃内停水のある人に気の上衝が起ったことをいう。

※「気上衝胸」～気の上衝は胃部にとどまらず、さらに上につきあげていることを表現す。

- ①胸苦しさ
- ②心悸亢進

この様な症状を生じる。

※「起則頭眩」～気の上衝はさらに頭部にまで達しようとしている事を表現す。
頭眩（めまい）～漢方では胃内停水のある人に起る症状。利尿剤で胃内の停水を除くと治るという経験からその様に考えた。

No.

茯苓四逆湯

		鎮静作用		強壮作用	
茯苓	4両	○		脾胃を補益 ……人参と配合すると強壮作用を増強.	
甘草	2両		瀉下作用 四逆湯		
乾姜	1両半				
附子	1枚				
人参	2両			○	

第22条 発汗若下之後、煩躁者、茯苓四逆湯、主之。
茯苓四両、甘草二両炙、乾姜一両半、附子一枚生用去皮破八片、人参2両。
右五味、以水三升、煮取一升二合、去滓、分温再服。

※ 第11条で「重ねて汗を発する者は四逆湯これを主る」とだけ表現していて、「重ねて汗を発する」とどの様な症状を引起すかについて何もふれていない。具体的なことは少陰病篇で論ずる為。

※ 煩躁（これまでに出てきたものをまとめると）
太陽中風 …… 青竜湯（第12条）
少陰病 …… 甘草乾姜湯（第11条）
厥陰病 …… 乾姜附子湯（第13条）…… 四逆湯でも良い
〃 …… 茯苓四逆湯（第22条）
この条文では煩躁を特にとり上げただけの後、鎮静剤としての茯苓と強壮剤としての人参を四逆湯を基本にして治療をしている。詳しくは厥陰病篇を見よということ。厥陰病における煩躁は、陽病における合病の場合と同じく、一種の反応現象の様なもの。
その他の煩躁
太陽温病 …… 五苓散
少陰病 …… 呉茱萸湯（第5条）

No.

芍薬甘草附子湯

芍薬	3両	補血
甘草	3両	補虚益気
附子	1枚	陰病を除く

第23条 発汗若下之後、反悪寒者、虚也。芍薬甘草附子湯、主之。
但欲寐者、実也、与調胃承気湯。
芍薬三両、甘草三両炙、附子一枚炮去皮破八片。右三味、以水五升、煮取一升五合、去滓、分温三服。

※ この条文は太陽病の（十一）型から →前段は（一・一）型 少陰病
→後段は（十・十）型 温病
に移行することを述べている

※ 前段は虚也で一応文は切れているので直接芍薬甘草附子湯主之とは直接つながらない。
その為、前段での唯一最二の処方であるという関係にはなっていない。
何故この処方を記してあるかに着目すると、第4条で太陽病が陽病と陰病に分裂した初期には等しく桂枝湯を用いることができると論じている。桂枝湯を構成する5個の薬物のうち重要なものは桂枝、芍薬、甘草である。陰病に変ったことが明らかな時には桂枝を用いる必要がなく、その代りに附子を用いるのが妥当。この条をこの処方で述べている。

No.

梔子豉湯，梔子甘草豉湯，梔子生姜豉湯

	梔子湯	梔子甘草豉湯	梔子生姜豉湯	胸部(上焦)の熱をとる	鎮痙作用	鎮吐作用
梔子	14個	14個	14個	○		
甘草		2両			○ 緩急を緩める	
生姜			5両			○
香豉	4合	4合	4合	○（解表）		

第24条 発汗若下之後，虚煩，不得眠，若実劇者，必反覆顛倒，心中懊憹，梔子豉湯，主之。若少気者，梔子甘草湯主之。若嘔者梔子生姜豉湯，主之。梔子十四箇擘，香豉四合綿裹。右二味，以水四升，先煮梔子，得二升半，内豉，煮取一升半，去滓，分為二服，温進一服。梔子十四箇擘，甘草二両，香豉四合綿裹。右三味，以水四升，先煮梔子甘草，得二升半，内豉，煮取一升半，去滓，分為二服，温進一服。梔子十四箇擘，生姜5両，香豉四合綿裹，右三味以水四升，先煮梔子生姜，得二升半，内豉，煮取一升半，去滓，分為二服，温進一服。

※この条文では心下(胃部)の症状にふれていないので胸部(上焦)の熱状を考察する。つまり熱によって胸ぐるしく悶え，眠ることが出きない状態(虚煩)と更にその激症として，痛みまで伴う状態になり悶えころげまわる様(実煩)つまり煩燥に近い状態を説明している。結局ここでは悪寒については触れず，熱状だけを示しているので少陽病位の温病とその激症を述べている。そこで胸部(上焦)の熱をとる作用を持つ梔子と香豉を配合した梔子豉湯で治療する。もし胃部に自覚症状(例えば痞満，胃痛，胃痙攣等)のある場合は第23条の調胃承気湯の証である。

※「若少気」～もし(さらに)，呼吸量が少ない

肺炎からくる浅表呼吸に用いる ── 梔子甘草豉湯　甘草にて急迫を緩む

※「若嘔者」～さらに嘔する者

心下(胃部)にまで影響を及ぼしたので生姜を加えて治療。

No.

第64条 発汗，若下之後，煩熱，胸中窒者，梔子豉湯，主之。

※少陽温病の煩熱(身熱の甚だしいこと)により胸がつまる状態が第63条の厥陰病の状態からひき起る症状と類似しているのでそれ(第63条)と区別する為にここに上げている。

この状態は第24条の「虚煩」より重く「実劇者」より軽い状態をいっている。

No.

真武湯（玄武湯）

		利尿作用	健胃作用	鎮痛作用	強壮作用
白朮	3両	○			健脾
茯苓	3両	○			健脾補中
芍薬	3両			○	○
生姜	3両		○ 嘔吐を治す		
附子	1枚	○		○	○ 陰を除く

→腎の炎症を治す

→胃内停水の改善

第25条 太陽病、発汗、汗出後、其人仍発熱、心下悸、頭眩、身瞤動、振々欲擗地、脈沈緊者、真武湯、主之。

※「其人仍発熱」～ 第7条と同じ様に、今までとはすっかりとちがって依然として太陽病の時と同じように発熱し、胃部の動悸（心下悸）、めまい（頭眩）、からだの筋肉がピクピク動き（身瞤動）、ゆらゆらゆれて（振々）、いまにも地面にたおれそう。

この様な症状は ① 陽明病の熱（裏寒を作っていない）
② 胃内停水による（少陰病）
が考えられる。

そこで最終的には脈診によって陰陽を決める。

脈沈 → 陰病。

緊 → 水毒の甚だしいことを示す。

従ってこの場合裏寒はないのだから、少陰温病であることになる。

※ 擗（へき） ＝ 躃（へき）（たおれる）

No.

第59条 少陰病、腹痛、小便不利、四肢沈重疼痛、自下利、或欬、或小便利、或不下利、嘔者、真武湯、主之。

この条文は「少陰病 … 自下利」までが少陰病の正証を示し「或欬 … 嘔者」までをその変証として論じている。

※「腹痛」…「胃内停水」と「胃寒」のあることを示している。この胃寒は裏寒によって引起されたものであることを次の「小便不利」「四肢沈重疼痛」で示している。

※「小便不利」…… 腎の炎症によって起る。

※「四肢沈重疼痛」…… 水毒によって生ずる症状

※「自下利」……「内位」（胃と小腸）に冷えが生じた為に起る。この冷えの原因は裏寒から来ている。

※「欬」…… 胸部の水毒によって起る。

※「小便利」…… 裏寒によって腎膀胱が冷えた時に起る。

※「不下利、嘔」…… 内寒の程度が小さく、胃内の停水が動かされた時に起る。

No.

小柴胡湯

		往来寒熱	胸脇苦満	心煩	喜嘔	嘿々不欲飲食
柴胡	半斤	○	○			
黄芩	三両	○	○			
半夏	半升			○(鎮静)	○	
生姜	三両			○	○	
人参	三両					○
甘草	三両					○
大棗	十二枚					○

第26条 傷寒、中風、往来寒熱、胸脇苦満、嘿々不欲飲食、心煩喜嘔或胸中煩而不嘔、或渇、或腹中痛、或脇下痞鞕、或心下悸小便不利、或不渇身有微熱、或咳者、小柴胡湯、主之。
柴胡半斤、黄芩三両、半夏半升洗、生姜三両切、人参三両、甘草三両炙、大棗十二枚擘。右七味、以水一斗二升、煮取六升、去滓、再煎取三升、温服一升、日三服。

※ ここでの傷寒、中風は、傷寒有別、中風有別の意、病状の推行と変化を示す。

※「往来寒熱……心煩喜嘔」までは小柴胡湯の正証を述べている。
少陽病の正証を表現する時、
{往来寒熱(悪寒と発熱が交替で現れる)という特有の熱状態、
胸脇苦満(胸部および側胸部に何かが塡充したるが如く感じて苦しいこと)
嘿々不欲飲食(気持が晴いために飲食不振であること)} 患者の自覚症状の部位、
心煩喜嘔~胸苦しくてしばしば嘔する。

※「或胸中煩……或咳者」までは小柴胡湯の変証を述べている。
"口渇、腹痛、脇下痞鞕、心下悸、小便不利"等は少陽病の激症であり陽明位に影響を与えてこの種な症状をひきおこした。つまり少陽病の激症は陽明位(病病)と太陽位(合病)に影響を与える。
。「渇」は陽明裏位に影響を及ぼした場合
「腹中痛」は陽明内位または裏位に及ぼした場合、「脇下痞鞕」は陽明裏位、
「心下悸し小便不利」は陽明裏位、
「渇せず身に微熱あり」および「咳」は太陽外位に影響を与えたもの

No.

第27条 傷寒、身熱悪風、頸項強、脇下満、手足温、而渇者、小柴胡湯、主之。

※「身熱」~微熱と表現することもある。少陽病にも陽明病にも現われる熱状態。
「悪風」が同時に存在すれば太陽病と区別がつきにくい。即ちこの場合は少なくとも太陽病と少陽病にまたがった状態のように思われる。
※「頸項強」~項強は太陽病であり、頸強(胸鎖乳突筋が強ばる)は少陽病をます。つまり太陽病と少陽病にまたがった状態を示す。
※「脇下満」~ゆきばりが重苦しいこと。陽明位の症状。
※「手足温」~手足の熱で病人自らその熱を覚える。陽明位の症状。
※「而渇」~ひどくなって、陽明裏位に作用して口渇が起った。

すなわちこの条文は太陽、少陽、陽明にわたる三陽の併病とみられる。
併病ならばそれぞれの病位に対する薬物や処方が加味合方されるのが原則であるが、この場合小柴胡湯という合病のときに似た処方を使用している。
これは小柴胡湯を構成する七種の薬物の中に陽明位に作用する薬物が多いからで、少陽の処方で治療するのが原則であるなどと考えてはいけない。

第28条 傷寒、陽脈濇、陰脈弦、法当腹中急痛、先与建中湯、不愈者、小柴胡湯、主之。

※ 宋板に「腹痛し時に痛むものは太陰に属す」という条文があるために「腹中急痛」という言で腹中痛という症状は軽く考えてはいけない場合のあることを示したもの、
症状が陽病(少陽病)であっても脈状が陰に属するときは大事をとって太陰病と見做し反対に症状が陰病(太陰病)であっても脈状が陽に属するときは脈証を重視する基本的な場があるにも拘らず大事をとって太陰として治療を行なう。それで先ず建中湯を与えて、それでも癒病がとれない時小柴胡湯を使用する。

No.

建中湯（小建中湯）

		鎮痛鎮痙作用	強壮作用	消化管を温める
桂枝	3両	芍薬の作用を助ける		○
芍薬	6両	◎	◎	
甘草	2両	芍薬の作用を助ける	芍薬の作用を助ける	
生姜	3両		芍薬の作用を助ける	○
大棗	12枚	芍薬の作用を助ける	芍薬の作用を助ける	
膠飴	1升	○	○	

桂枝湯と同じ構成であるが、芍薬の量が倍量になっている。
⇓
従って桂枝加芍薬膠飴湯という構成

第28条 傷寒、陽脈濇、陰脈弦、法当腹中急痛、先与建中湯、不愈者、小柴胡湯、主之。

※「陽脈濇、陰脈弦」～ 少陽病であっても脈は濇（ショク）（とどこおる）→血行が悪い為陰病の脈
太陰病であっても脈は弦（つよい）
↓
予後の悪い徴候
症状は陰病となるが脈は陽病の脈状。
↓
一般に予後は良い。

第29条 傷寒、心中悸而煩者、建中湯、主之。

※この条文も和28条と同じ様に、第26条（小建中湯）に関連し、「心煩」或いは「胸中煩而不嘔」或いは「心下悸小便不利」との関係を考察しなければならない。
「心中悸而煩」は「心煩」等に似ているが軽く考えてはいけない場合のあることを示している。
その病位は太陰にあって而して少陽に関わる者 ⇒ 太陰温病という事になる。
この状態を治すことを建中と表現している。つまり中気を建てるという意味になる。

- 調胃承気湯（23条）胃部に自覚症状（腹満、胃痛、胃痙等）
- 梔子豉湯（76条）胃部に自覚症状なし、虚煩、実煩、心中悸なし。
- 建中湯（29条）心中悸あり。太陰温病。

No.

黄耆建中湯（金匱要略）

	中国方
桂枝	6g
芍薬	12g
甘草	6g
生姜	6g
大棗	9g
膠飴	30g
黄耆	18g

小建中湯＋黄耆

気虚の症状が顕著な慢性腹痛には、小建中湯に黄耆を加える。
胃・十二指腸潰瘍に対して効果有り。潰瘍癒合を促進する。
黄耆は肌表（ヒョウ）の気を補うので、表虚に適す。人参は五臓の気を補うので裏虚に適用。人参と黄耆を同時に使用すると、補益力が増強してより全面的になる。
（ex. 補中益気湯）

大建中湯（金匱要略）

	中国方	抗寒作用	強壮作用	
蜀椒	6g	○		止痛
乾姜	3g	○		止吐
人参	9g		○	消化吸収機能亢進のため
膠飴	30g		○	〃 鎮痛鎮痙

No.

大柴胡湯

		往来寒熱	胸脇苦満	鎮嘔作用	
柴胡	半斤	○	○		
黄芩	三両	○	○		
半夏	半升			○	
生姜	五両			○	健胃作用
芍薬	三両				腹痛を止める
枳実	四枚				腹痛を止める 健胃作用
大棗	12枚				健胃作用

第30条 太陽病、反二三下之後、嘔不止、心下急、[illegible]微煩者、大柴胡湯、主之。 柴胡半斤、黄芩三両、半夏半升、生姜五両、芍薬三両、枳実四枚炙、大棗12枚擘。右七味、以水一斗二升煮、取六升、去滓、再煎、取三升、温服一升、日三服。

※「太陽病反二三下之後」～太陽病であったから発汗すべきところ、間違って二三回下剤を起させた為に病位が変って次の様になった。

※「嘔不止」～第26条(小柴湯)の喜嘔より症状が激しいことを示す。

※「心下急」～心下部(胃部)にいろいろした感じがすること。26条の心下痞鞕より一段と症状が進行したもの。

※「[illegible]微煩」～[illegible]は気がふさがることで26条の「嘿々」より症状が重い。微煩は心煩の軽いもの。 以上よりこの条文は小柴胡湯症より胃部の症状が激しいことがわかる。胸部の症状は言及されてない。しかし第26条と比較する形になっているので同じ状態と推定す。

※小柴胡湯と比較すると生姜が3両から5両になっていて半夏との共力作用で鎮嘔作用が著しく強化されている。

※人参と甘草がなくその代りに芍薬と枳実が加えられて胃部に対する作用が補から瀉に変えられていること示す。

No.

桃仁承気湯(桃核承気湯、桃人承気湯)

桃仁	50箇	血毒を治す		
大黄	4両		調胃承気湯	
甘草	2両		陽明内位の病に使用	
芒消	2合			
桂枝	2両			鎮痛作用

第31条 太陽病、熱結膀胱、其人如狂、血自下、下者愈。但少腹急結者、与桃仁承気湯。 桃仁五十箇去皮尖、大黄四両酒洗、甘草二両炙、芒消二合、桂枝二両去皮。右五味、以七升煮、取二升半、去滓、内芒消、更上微火、一両沸、温服五合。

※第30条(大柴胡湯)よりも熱邪が下方に移行していることを「熱結膀胱」と表現している。膀胱に熱邪が結すると貯蔵された水液から邪毒が血液に入りこみ、やがて全身に邪毒がまわる。従って裏位から血液によって邪毒が内位(腸)に転位した為、陽明病で論じてあるように内位に熱邪があるとにに脳症を起して、譫語(うわごと)をいうのである。

この時に使用する処方として 大承気湯、小承気湯、調胃承気湯、柴胡加竜骨牡蠣湯 } 血熱

もう一方熱邪が血室(子宮)に入って狂の如くなった時、桃仁承気湯、抵当湯 } 熱邪が最も深く入った状態

※「下者愈」～自ら血の下る者は愈ゆ。

※「但少腹急結者」～血熱が下腹部に集中したことと解釈。

※桃核承気湯を用いる人で顔の血色がいいのは血液が上衝する為。桂枝の量が少ないので気の上衝を治すように働かず、鎮痛作用を期待して使用。

※傷寒論 20-25「太陽病、有外証未解不可下。下之為逆。」

気の上衝があった時は大黄、芒消などの下剤を与えてはいけない。

No.

血の病証

中医学でいう血には、血の濡養作用、血液循環、血液という3つの意味があり、それぞれの病態として、血虚、血瘀、出血がみられる。

1) 血虚 ～ 血のもつ濡養(保養・滋潤)作用の不足のこと。

原因として
- ① 脾胃の運化作用の低下に伴う血の生成源の不足
- ② 出血や血液破壊に伴う血の量の不足
- ③ 循環不全(血瘀)による血の供給不足。

〈主症状〉

a. 血虚一般 ～ 顔色が悪い、皮膚につやがない、頭がふらつく、目がかすむ、爪の色が悪い、舌質はやや淡白、脈は細。

b. 心血虚(心の「神を主る」「血脈を主る」機能の異常)
動悸、不安感、不眠、夢をよくみる、健忘

c. 肝血虚(肝の「血を蔵す」「目に開竅する」「筋を主る」機能の異常)
めまい、目がかすむ、目の乾燥感、目がつかれる、手足のしびれ、筋肉のけいれん、月経の遅れ、月経血の過少、無月経。

〈施治〉

治法は補血(養血)である。

- a. 一般に 当帰、熟地黄、芍薬、何首烏、阿膠、早蓮草を用う(補血薬)
- b. 心血虚には 丹参、酸棗仁、柏子仁、遠志、竜眼肉等の養心安神薬
- c. 肝血虚には 枸杞子、桑椹、鶏血藤などの補血養肝薬を加える

補血薬は滋養強壮・栄養・神経機能改善などの作用があり、間接的に造血機能も促進する。多くの補血薬は味がこくしつこいので、長期間服用すると、消化不良を起しやすい。従って健脾薬を配合するのがよい。

〈代表方剤〉

帰脾湯、四物湯、補肝湯など。

2) 陰虚 ～ 血虚の程度がすすみ、津液の不足の症候が表われたもの。

栄養不良・脱水などにより体内の異化作用の亢進・自律神経系の興奮・代謝の過剰・脳の抑制過程の減退などを生じ、これに伴い、熱証が表われたもので、これを「虚熱」という。

〈主症状〉

血虚の症候以外に、顔面紅潮、のぼせ、胸があつ苦しい、熱感、いらいら、不眠

No.

よく目がさめる、手のひらや足の裏のほてり、口の乾き、咽の乾き、唇のひびわれ、ねあせ、舌質が深紅、舌の乾燥、舌の裂紋、舌苔が少ない、剥苔、鏡面舌、脈は細数などの熱証と燥証がみられる。

〈施治〉

治法は補陰(養陰、滋陰)で、滋潤、保養、鎮静などの作用をもつ補陰薬と補血薬を用いる。

① 肺・胃の陰虚には 沙参、麦門冬、石斛、百合など

② 肝・腎の陰虚には 玄参、生地黄、天門冬、女貞子、亀板、鱉甲など

③ 熱証が強い場合には、青蒿、白薇、銀柴胡、地骨皮、知母、黄柏などの清虚熱薬や牡丹皮・山梔子・黄連などの清熱薬を配合する。

〈代表方剤〉

養胃湯、益胃湯、沙参麦門冬湯、六味丸、左帰丸、左帰飲など。

3 血瘀 ～ 基本的には循環障害を指す。

① 微小循環の障害 ～ 血流の緩慢化や停滞、血管内の血小板・血球の凝集と閉塞、血管の形態異常・狭窄あるいは閉塞、血管外への溢血・出血など。

② 血液のレオロジーの異常 ～ 血液濃度の増高、血漿比粘度の増大、血液凝固能の増大

③ 血液の流体力学的異常 ～ 心臓血能の減弱、血管壁の抵抗性増大など。

④ 外傷性・炎症性の出血や組織での血液貯留あるいは骨盤内のうっ血など

⑤ 続発する炎症・うっ血・水腫・びらん・壊死・硬化・細胞増殖・変性・血管透過性増大などが考えられる。

原因として、外傷、炎症、高熱、手術侵襲・出産・月経異常・出血性疾患・免疫異常・寒冷による血管収縮、血管運動神経の失調(気滞)、心血管系の疾患などさまざまである。

現在では、心臓・脳・肺・眼底・四肢などの多くの血管の疾患、アレルギー性紫斑病・血小板減少性紫斑病・機能性子宮出血・潰瘍出血などの出血性疾患、鞏皮症・象皮病・瘢痕ケロイド・慢性関節リウマチ・腹腔内腫瘍・癒着などの結合織増殖と血流障害をきたす疾患、子宮外妊娠・胆のう炎・腸閉塞・静脈炎・血栓性動脈炎などの手術を必要とする疾患、急性及び慢性肝炎・急性及び慢性腎炎・紅斑性狼瘡・急性びまん性血管内血

No.

〈主症状〉

顔色がどす黒い、皮膚につやがなくかさかさしている。色素沈着、小血管の拡張、クモ状血管、腹壁静脈の怒張、静脈瘤、口唇や舌が紫色を呈す、舌に紫斑や瘀点がある。舌の裏面の静脈の拡張や紫暗色・脈は沈細あるいは渋などの循環障害の症候のほか頭痛・肩こり・健忘・寝つきや寝おきが悪い、口渇するが水分は欲しくない、冷えのぼせ、便秘あるいは便の回数が多い、便が黒いなどの症状、女性では月経痛・月経のおくれ、月経血が暗黒色で凝塊がまじる、無月経など、この他脳血管障害や代謝異常にもとづく精神神経症状も含まれる。

尚、血瘀のために血の濡養作用が低下したり、機能障害をひきおこすと、血虚や気滞が発生し、気滞により血管運動の失調がおころと血瘀があらわれる。

〈施治〉

治法は活血化瘀である。

- 血管拡張により3つ血を除く～桃仁、紅花、川芎、丹参、芍薬、益母草、沢蘭等 } 活血化瘀薬
- 鎮痛効果もそなえた～乳香、没薬、延胡索、鬱金、五霊脂、牛膝、蘇木等 }
- 血腫や陳旧性の血瘀で腫瘤の認められるときには、三稜、莪朮、穿山甲、蜜虫、水蛭などの抗凝血・分解吸収、血管拡張の作用をもつ破血薬を用いる。
- 出血に対しては三七、蒲黄、小薊、茜草根などの活血化瘀と止血の効能をそなえた薬物を使用する。
- 便秘を伴う場合や効果を強めるときには大黄・芒硝を加えて瀉下する。
- また気滞血瘀の状況が多いので、活血化瘀薬によく理気薬を加える。
  (陳皮、枳実、枳殻、橘、烏薬、茹白等)
- この他、気虚、血虚、寒盛、熱盛などを伴えばそれぞれ補気、補血、祛寒、清熱の薬物を加えるべきである。

〈代表方剤〉

桃紅四物湯、血府逐瘀湯、補陽還伍湯、桃核承気湯、温薬散、芎帰調血飲第一加減、疏紅活血湯、桂枝茯苓丸、当帰四逆湯、温経湯、大黄蜜虫丸、抵当丸。

No.

逍遙散（和剤局方）

	中医学	鎮痛・鎮静	水毒改善	健胃作用
柴胡	9g	○ 肝の改善		
当帰	9g	○		
芍薬	9g	○		
白朮	9g		○	
茯苓	9g		○	
薄荷	3g			○
生姜	2g			○
甘草	3g			○

- 肝は「血を蔵す」「疏泄を主る」「筋を主る」「目に開竅する」機能があるので、情緒の変動・自律神経系の失調・栄養障害・運動系の異常・目の障害などが表われる。
- 肝気鬱結（肝気鬱滞・肝鬱気滞・肝鬱・気鬱）
  肝の「疏泄を主る」機能の障害で、自律神経系の過緊張が主となるものと考えられる。精神的な緊張・情緒の過度の変動などによって生じるが、病邪の侵襲・陰陽失調などでも表われる。
  この状態が続くと肝火上炎（肝の陽気の過亢進）に移行することが多く、血瘀・痰飲、陰虚なども生じやすい。
- 〈主症状〉・ゆううつ感、情緒不安定、いらいら、怒りっぽい、両胸脇部の張った痛み、乳房が張る、月経痛、月経不順、肝腫、脾腫、子宮筋腫などの腹部の腫瘤。
- 〈施治〉治法は疏肝解鬱
  柴胡・鬱金・青皮・川楝子・枳実などの疏肝解鬱理気薬を使用。
  尚これらの薬物は燥性が強い為陰液を消耗するおそれがあるので芍薬・当帰・熟地黄・枸杞子などの補血薬を配合する必要あり。
- 〈代表方剤〉四逆散、柴胡疏肝湯、逍遙散。

- 柴胡と芍薬を配合すると解鬱効果が高まり刺激が和らぐ。芍薬の鎮痛効果も増強す。
- 当帰と芍薬を配合すると補血、補陰の効果が強まる。

No.

加味逍遥散（丹梔逍遥散）（内科摘要）

	中用量		
牡丹皮	6g		瘀血をとる力が強まる。
山梔子	6g		
柴胡	7g	逍遥散	
当帰	12g		
芍薬	9g		
白朮	9g		
茯苓	9g		
甘草	3g		
薄荷	3g		
生姜	3g		

黒、逍遥散（医学大書・女科摘要）

			補血作用
地黄	10g		○
柴胡	9g	逍遥散	
当帰	12g		○
芍薬	9g		○
白朮	9g		
茯苓	9g		
甘草	3g		
薄荷	3g		
生姜	3g		

No.

桂枝茯苓丸　（全置要略）

		駆瘀血剤	駆水剤	鎮痛作用
桂枝	各等分	○	○	○
茯苓			○	
牡丹皮	粉末である。	○		
桃仁		○		月経痛、経月起その下腹部痛
芍薬		○		○

※ 牡丹皮・桂枝はどちらも血液循環を改善するが、牡丹皮は寒性であるから熱証に、桂枝は温性であるから寒証に適す。婦人科疾患には同時に使用することあり、これにより活血祛瘀の効能が強められる。

※ 桂枝は血液循環機能を促進し、発汗と利尿の作用を強めることによって局所の体液停滞を軽減させるが、この種な作用は茯苓、白朮などの利水、化湿の薬物を配合してはじめて顕著な効果を示す。

No.

当帰芍薬散（金匱要略）

		血毒改善	水毒改善		
当帰	3g	○		＞補血補陰作用が減る	
芍薬	6g	○			
川芎	3g	○			
茯苓	4.5g		○		＞胃内停水を治す
白朮	4.5g		○		
沢瀉	3.5g		○		

※ 内臓下垂（胃下垂）のある人、色白は胃腸美人に使用。
茯苓、白朮の組合せで胃内停水を治す。

※ 当帰には肝臓の状態を改善する作用がある。肝臓を庇護して肝グリコーゲンの減少を防ぐ。 尚当帰は成分が不安定の為、散剤にした方が効果がたしかである。

※ 川芎は胃腸障害を起こすおそれがある為、酒などで飲む。また副作用を防ぐ為のくふうとして、縮砂、生姜などを追加処方することも有る。

※ 沢瀉湯（金匱にっき）
心下有支飲、其人苦冒眩、沢瀉湯主之。 沢瀉、白朮

瘡 …… 外傷によるおでき
癰 …… 内部にできたおでき
瘍 …… 外部にできたおでき

No.

膠艾四物湯（芎帰膠艾湯）〈金匱要略〉

		(中医学)	補血作用	止血作用
阿膠		15g		○
艾葉		15g		○
当帰	四物湯	12g		
地黄	四物湯	15g		
芍薬	四物湯	9g		
川芎	四物湯	9g		
甘草		3g		

血府逐瘀湯〈医林改錯〉

	中医学	駆瘀血	補血作用	鎮痛・鎮痙
当帰	9g		○	○
地黄	9g		○	
桃仁	12g	○		脳痛・胸痛などの痛みをとる
紅花	9g	○		
枳殻	6g			⇒ 健胃作用
芍薬	6g		○	
柴胡	3g			
甘草	3g			⇒ 健胃作用
桔梗	4.5g			⇒ 習慣的に上焦の消炎剤には桔梗を上部に引き上げる為に加える。
川芎	4.5g		○	○ 吸収抑制 鉄加御
牛膝	9g	○		○ 吸収抑制 鎮痛作用

効能：活血・行瘀・理気・止痛

No.

補陽還五湯〈医林改錯〉

	中医学	駆於血	補血作用	補気作用
黄耆	30g			強壮作用主等
当帰尾	6g		○	
芍薬	5g		○	
地竜	3g			鎮痙作用
川芎	3g		○	
桃仁	3g	○		
紅花	3g	○		

効能：補気・活血通絡

脳卒中による半身不随にも使用。

膈下逐瘀湯〈医林改錯〉

	中医学	駆於血	補血作用	鎮痛作用	
五霊脂	9g			○	⇒ 瘀血による疼痛に使用（オオコウモリの糞便を乾燥したもの）
当帰	9g		○		
芍薬	9g		○	○	
桃仁	9g	○			
紅花	9g	○			
香附子	9g			○	⇒ 香附子＋烏薬＋延胡索
烏薬	9g			○	気滞による月経痛等の鎮痛作用を強める
甘草	9g				
川芎	6g		○	○	
牡丹皮	6g				
延胡索	6g			○	
枳殻	6g				

効能：活血祛瘀・行気止痛。

No.

少腹逐瘀湯〈医林改錯〉

	中医学	駆瘀血	補血	
肉桂	3g		○	⇒ 血流循環促進、健胃作用、下部部痛に延胡索・当帰・川芎と配合
小茴香	5g		○	⇒ 健胃作用
乾姜	1g		○	⇒
延胡索	9g	鎮痛・鎮痙		
没薬	6g	○		
当帰	9g		○	
川芎	6g		○	
芍薬	9g	鎮痛・鎮痙	○	
蒲黄	9g	○		
五霊脂	9g	○		

効能：活血化瘀・行気止痛。

大黄牡丹皮湯〈金匱要略〉

	中医学	駆瘀血	滞下
大黄	12g		○
牡丹皮	9g	○	
桃仁	12g	○	
冬瓜仁	15g	消炎（コクイコンと同じ使用）	
芒硝	9g		○

効能：清熱逐瘀・散血消癰

抵当丸〈傷寒論〉

	中医学	駆瘀血	
水蛭	9g	○	
虻虫	9g	○（アブ）	
桃仁	9g	○	
大黄	60g		

粉末を蜂蜜で丸として1日1回3g

大黄䗪虫丸

		駆瘀血	
䗪虫	30g	○	
水蛭	45g	○	
大黄	45g		
生地黄	300g		
杏仁	120g		
桃仁	120g	○	
乾漆	30g		
甘草	60g		
虻虫	45g	○	
芍薬	120g		
黄芩	60g		
蜂蠐	45g	○	

細末を蜂蜜で丸として1日3～6g温酒で服用

効能：破血消癥・逐瘀通経

No.

陥胸湯（大陥胸湯）

		瀉下作用
大黄	6両	○
芒消	1升	○ 塩類性下剤
甘遂	1両	○

第32条 傷寒．結胸．熱実．脈沈緊．心下痛．按之石硬，陥胸湯．主之。 大黄六両酒洗．芒消一升．甘遂一両末。右三味．以水六升．先煮大黄．取二升．去滓．内芒消．煮一両沸．内甘遂末．温服一升。

※ この条文では悪寒に言及していないから、(+,+)型 すなわち温病であり、条文中に「胸」と「心下」とあり、部位からみて少陽温病である。

また第31条（桃仁承気湯）が熱邪と血毒によるものであったが、第32条と第33条は熱邪と水毒によるものについての例である。

※「結胸」～ 水飲が胸脇部に結（堅くとりつく）ぼれた病気。
乾性肺炎、肋膜炎、肺気腫、腹膜炎等。

※「熱実」～熱 が充満していること。傷寒あるいは中風の形で発病し、若干の日数を経過して悪寒がなく熱が高くなり胸痛を覚える様になった状態を表現している。

※「脈沈緊」～緊脈は水毒の甚だしい時の脈であり、沈脈は普通陰病の脈であるがここでは痛みが甚しく気血の滞りが生じている為に沈脈となった

※「心下痛」～ みぞおちの部分の痛み。胃部、膵臓、脾臓等の痛み。

※「按之石硬者」～ 腹診で なでる(按)と石の如くかたくなっている。つまり結胸が下方の方に影響をおよぼしていることを示す。

※ 本条では心下痛は脈沈緊の後に置いてあることより、結胸という名称から考えると主要な証候は胸痛等の胸部の症状と考えられる。

No.

第33条 太陽病．発汗而復下之後．舌上燥．渇．日晡所有潮熱．従心下至小腹鞕満．痛不可近者．陥胸湯．主之。

※ この条文は水毒が腹部にまで影響を及ぼした変証（激証）を述べている。

※「舌上燥」「渇」～ 舌上がかわき、口が渇する
「裏熱によって起った症状と解釈」

※「日晡所有潮熱」～ 日晡（ひぐれの意、晡は申の刻、今の午后4時頃、
潮熱 ---- 毎日一定の時刻（午後のことが多い）に体温上昇が見られること。

※「従心下至小腹鞕満」～ 心下より小腹にいたるまで鞕満 ⇒ 鞕満が腹部にまでおよんでいる
大承気湯の証 --- 陽明病 ⇐

しかし次の句「痛不可近者」により 腹が鞕満して痛み、手を近づけることもできない程神経が過敏になっていることが水毒によるものであることをのべていると思われる。

No.

半夏瀉心湯

		胸部の熱をとる	鎮嘔
半夏	半升		(半夏人参乾姜池)
黄連	3両	清熱(胸熱をとり下痢を止める)	
黄芩	3両		
人参	3両		
乾姜	3両		
甘草	3両		
大棗	12枚		

149条 太陽病、発汗而復下之後、心下満、鞕痛者、為結胸、但満而不痛者、為痞、半夏瀉心湯、主之。 半夏半升洗、黄連三両、黄芩三両、人参三両、乾姜三両、甘草三両炙、大棗十二枚擘。右七味、以水一斗煮、取六升、去滓、再煎、取三升、温服一升、日三服。

※ 半夏瀉心湯 之証
① 胃部(心下部)が重苦しく(満)、堅く(鞕)、痛む者 ⇒ 結胸…
これは胸部に水毒が蓄積して生じた病気。 肺炎や肋膜炎の初期に似ている
② 胃部が重苦しいけれど、痛みはない。⇒ 痞 …> 胃腸病。
これは心気鬱結している。つまり気のつかえであり、胃部痛みは少ない

つまり結胸と痞では水毒の存在する程度に差がある

※ 浮ぶとは 心気の鬱結を輸写する義 つまり気のつかえを取ることで黄連と黄芩の組合せをおこなっている。

※ 金匱要略 婦人妊娠病篇 第20「妊娠して嘔吐止まざるは乾姜人参半夏丸これを主る」

※ 金匱要略 嘔吐噦下利病篇 第17 半夏乾姜散。

No.

小陥胸湯 (宋板傷寒論)

		清熱作用	祛痰作用
黄連	1両	胸部熱をとる	
半夏	半升		○
括楼実		○	○

胸部の熱痰で、とくに胸痛を伴う咳嗽・多痰・痰がすっきりと喀出できないなどの症状がある時。(乳性気管支炎、湿性肋膜炎-肺炎 など)

柴陥湯 (通俗傷寒論)

	帥分		祛痰作用	鎮嘔
柴胡	9g	○ 往来寒熱		
黄芩	6g	○ 胸脇苦満		
黄連	3g	○		
半夏	5g	清熱作用	○	○
括楼実	15g	○	○	
枳実	45g			胃腸の蠕動亢進
桔梗	6g		○	
生姜	5g			○

小陥胸湯よりも熱像のつよい場合。柴胡・黄芩を配合している。

No.

十棗湯

		小腸性峻下剤	利尿作用	
大棗	10枚		△	胃腸の停滞
芫花	1両	○	○	
甘遂	1両	○	○	
大戟	1両	○	○	

第36条 太陽中風、下利嘔逆、発作有時、頭痛、心下痞、鞕満、引脇下痛、乾嘔、短気、汗出、不悪寒者、表解、裏未和也、十棗湯主之。 大棗十枚擘、芫花熬末、甘遂末、大戟末。右四味、以水一升半、先煮大棗、取一升、去滓、内諸薬末等分一両、温服之。

※この条文は結胸や痞と同じ様な症状を呈した場合の事であるが、中風系列で痰気が進行した時にも水毒が多い時には同じ症状となることを示している。

※「不利嘔逆、発作有時」～下利嘔逆の発作が時々起る。

頭痛し、心下痞し、鞕満して、脇下(脇腹)に引いて痛み、乾嘔し、短気(呼吸の間隔が短いこと)し汗出で、悪寒せず という諸症状 ⟹ 結胸の条文の症状と同じ。

胸腹部に存在する水毒によって生じたものと判断できる。

それゆえに下利嘔逆の発作が時々ある。 ……これ等を→「裏いまだ和せず」と表現

※峻下剤を使用する時表証のない事を確認。

頭痛・汗出という症状の存在が表証とまぎらわしいが脈証によって、それが表証でないことを示したのが「表解」と表現している。

No.

生姜瀉心湯

		清熱作用	
生姜	4両		
黄連	3両	胃熱をとり下痢を治す	
黄芩	3両		
人参	3両		
甘草	3両		
大棗	12枚		
半夏	半升		

(生姜半夏人参湯)

第37条 傷寒、汗出解之後、胃中不和、心下痞鞕、乾噫食臭、脇下有水気、腹中雷鳴下利者、生姜瀉心湯主之。 生姜四両切、黄連三両、黄芩三両、人参三両、甘草三両、大棗十二枚擘、半夏半升洗。右七味、以水一斗煮、取六升、去滓、再煎、取三升、温服一升、日二服。

※「心下痞鞕」「乾噫食臭」～胃中不和によって起きた症状。

心下(胃の部分)がつかえて堅くなり、食べた物の異常発酵したくさいおくび(げっぷ)を出す。

胃中不和は平素水毒を持っていたので、胃内停水を伴い、消化機能が衰えて飲食物が停滞している状態をいう。

※「脇下有水気」～平素より脇下(脇腹)に水気(水飲)が存在すると解釈。

※「腹中雷鳴下利」～水毒が食べた物と一緒になって腸管を移動してゴロゴロと腹鳴を起して下痢をする。

※「腹中雷鳴下利」と表現してあればそれだけで、腹部の消化管に水気のあることがわかるのにあえてその前に「脇下有水気」という句が置いてある。これはこの条文が二段に分れている事を示し、生姜瀉心湯は、①胃中不和にも②脇下有水気にも用いてよい事を示している。

※半夏瀉心湯を使用してもよいのだが、胃中の熱の為にくさいげっぷが出るのだから、乾姜を生姜に代えた生姜瀉心湯が一層適している。

金匱要略の嘔吐噦下利病篇第17の「生姜半夏湯」に、胃弱の為に人参を加えたもの

※瀉心湯を構成する黄連と黄芩は、ここでは胃の熱をとり、下痢を治すことにはたらき、心(胸中)の熱をとることに関係せず。従って半夏瀉心湯も胃腸の病気に広く使用されるゆえんである。

No.

甘草瀉心湯

		急迫を主治	鎮嘔	胃熱をとり下痢を治す
甘草	4両	○		
黄連	3両	甘草乾姜湯		○ 瀉心湯
黄芩	3両			
乾姜	3両	○	○ 半夏乾姜湯	
大棗	12枚			
半夏	半斤		○	

第38条 傷寒中風、反二三下之後、其人下利日数十行、穀不化、腹中雷鳴、心下痞、鞕満、乾嘔、心煩不得安者、甘草瀉心湯主之。甘草四両炙、黄連三両、黄芩三両、乾姜三両、大棗十二枚擘、半夏半斤洗。六味、以水一斗煮、取六斤、去滓、再煎、取三斤、温服一斤、日三服。

※本条文は少陰温病となった事を表わしている。

「穀不化、腹中雷鳴」～食物を消化する力をなくし、食べた物が腸管を移動し、ゴロゴロと腹鳴を起し下痢をする

第7条(桂枝加附子湯)「太陽病、汗を発し、逆に漏れ止まず……」と同じ。

① 汗が止まらなくなった
② 下利が止まらなくなった
} ⇒ 少陰病

※「心下痞、鞕満、乾嘔、心煩不得安」～第37条(生姜瀉心湯)と同じく結胸と痞の混合した症状

甘草・乾姜 ― 甘草乾姜湯(第11条)～陰病で嘔吐するときに熱性の薬物で鎮嘔作用の強い乾姜と、急迫を治し、気を下し、温める作用のある甘草を併用

半夏・乾姜 ― 半夏乾姜湯 金匱要略の嘔吐噦下利篇第17

黄連・黄芩 ― 瀉心湯

No.

黄連湯

		胸痛	煩悸	嘔吐	腹中痛
黄連	3両	○	○		
人参	3両			○	
乾姜	3両			○ (半夏人参乾姜湯)	○
桂枝	3両		○		○
甘草	3両				○
大棗	12枚				○
半夏	半斤	○		○	

第39条 傷寒、胸中有熱、胃中有邪気、腹中痛、欲嘔吐者、黄連湯主之。黄連三両、人参三両、乾姜三両、桂枝三両去皮、甘草三両炙、大棗十二枚擘、半夏半斤洗。右七味、以水一斗煮、取三斤、去滓、温服一斤。

※「胸中有熱」と「胃中有邪気」は互文になっている。

つまり胸と胃には熱邪も寒邪(水毒)もある。

{ 胸に熱邪と水毒があることから胸痛、煩悸という症状が表われ、
{ 胃は腹中痛と嘔吐という症状

※半夏瀉心湯の黄芩三両の代りに桂枝3両にすれば黄連湯になる。

三瀉心湯のように下痢症状がない為黄芩を必要としない。

黄芩湯 及び 黄芩加半夏生姜湯

		止下	腹痛	嘔	
黄芩	3両	○ 腹部の熱を除き下痢を治す			○ 胸部の熱をとる → 黄芩湯
芍薬	3両	○	○ 腹痛		
甘草	2両		○		
大棗	12枚				
半夏	半升			○ 鎮嘔	
生姜	3両			○	

第40条 太陽与少陽合病。自下利者。黄芩湯。主之。若嘔者。黄芩加半夏生姜湯。主之。

※「太陽与少陽合病」～少陽病の激症である為に、太陽部位に反射的影響を与え(合病)また同時に陽明部位に病邪が移行(併病)した状態を意味する。

※ 第40条は「者」という字が「自下利」の下に位置しているから、これは合病の変証ということになる。それは第39条(小柴胡湯)で自下利が含まれていない

※「若嘔者」～干素疫飲のある者は少陽病の激症では嘔を生ずるのが当然であり、黄芩湯を構成する四種の薬物には嘔を治す作用をもつものがないから、半夏と生姜を加えなければならない。

※ 黄芩湯は少陽病の治療剤であるが、その時の熱状は往来寒熱ではない。つまり悪寒を生じていない。即ち少陽温病なのである。そう解釈すると若し嘔する者は黄芩加半夏湯これをもるというとき柴胡を加えない意味がはっきりする。

白虎湯

		裏熱を除く	口渇を止める	胃物を保護
石膏	1斤	○	○	
知母	6両	○	○	
甘草	2両			○
粳米	6合	○	○	○

第41条 傷寒、脈浮滑、表有熱、裏有寒者、白虎湯、主之。

石膏一斤砕、知母六両、甘草二両炙、粳米六合、右四味、以水一斗煮米熟湯成、去滓、温服一升。

※ 脈浮滑 の浮は次の表有熱に、滑はその次の裏有寒にかかる。

脈浮(利多より頭痛、項強、悪寒、発熱)
表にある悪寒は温病では急速に消失して発熱だけになる。従ってここでは悪寒と発熱の両方があるというのだから病気の初期であることになる。

脈滑(指先にまを転がす様な滑らかに去来する脈。熱を意味し、実を意味する。)
小便自利ないし快利。これは裏熱によって生じた症状であるが、あたかも寒冷による反応に似ているから裏有寒と表現し、滑をそれにかかる様にした。

※ 本条では脈証以外の具体的症状を表現していないのは、ここから出発して
①体力が衰える方向に病気が進展する場合(第42条、第43条)
②症状が激しくなる方向に進展する場合(第44条)
に具体的に予されているので、ここでは原理を示す方法をとっているだけ。

No.

第47条 三陽合病、腹満、身重、難以転側、口不仁、面垢、遺尿、発汗、譫語、下之、額上生汗、手足逆冷、若自汗出者、白虎湯、主之。

※ 三陽合病 ～ 陽明病の一変で、太陽、少陽の証を兼ね現わした場合。

※ 腹満 ～ 腹部に物がつまった感じがして重苦しいこと。

※ 身重 ～ からだが重たいと感ずることで、腹満の激証。(その為寝返りもできないと後述)

※ 口不仁 ～ 口内が麻痺して感覚のない状態。口苦(少陽病)も口渇(陽明病裏位)もわからない状態とみて、陽明裏位と少陽の激症。

※ 遺尿 ～ 小便自利の甚しいもの。陽明裏位の激症。

つまり、ここまでは陽明裏位の激症であり、少陽位(口不仁)に影響を与えていることをのべている。

※「発汗、譫語、下之、額上生汗…」

三陽の合病は発熱していても発汗してはいけない、また腹満があっても下してはならぬ、ことを説いたもの。

※「若自汗出者」～三陽合病の状態にさらに自汗出の症状が加っても、同じく白虎湯で治療することを意味している。自汗出は内熱あるいは裏熱が甚しい時に現われる症状。

第65条 傷寒、脈滑、厥者、裏有熱、白虎湯、主之。

※ 第61条からの表についての記述を除いたものに等しい。

※ 陽明病の手足厥冷は裏熱によって末端の血行が悪くなってしまったもの。⇒熱厥

厥陰病の手足厥冷は裏寒によって生じたもの。⇒寒厥

両者の原因は反対であるが症状が類似している。

また裏熱によって生じた口渇が、厥陰病における外熱、上熱下寒に類似している。

そこで厥陰病の状態を明確にさせる為にこの条文がここにあると思われる。

No.

大承気湯

		泻下作用	建胃作用	
大黄	4両	○ 内熱を除く	○	
厚朴	半斤		○ 健胃作用	＞腹部膨満・腹痛の改善
枳実	5枚	胃腸の蠕動を高める	○	
芒消	3合	○		

第45条 陽明病、発熱、汗出、譫語者、大承気湯、主之。

大黄四両酒洗、厚朴半斤炙去皮、枳実五枚炙、芒消三合。右四味、以水一斗、先煮厚朴枳実、取五升、内大黄、更煮、取二升、去滓、内芒消、更上微火一両沸、分温再服。

※ 本条の太陽病の条文に似てあることから、発病してからかなり早くこの状態になることをさそうとしている。陽明病では最初、発熱、無汗という状態で始まり、汗出という症状が表われて、大承気湯を使用する根拠が確立する、さらに症状が進行すると譫語するようになる。

宇板では 陽明病、発熱、汗多者、急下之、宜大承気湯、

この状態から病気がさらに進行すると

陽明病、脈遅、雖汗出、不悪寒者、其身必重、短気、腹満而喘、有潮熱(者、此外欲解、可攻裏也)、手足濈然汗出者、(此大便已鞕也)大承気湯、主之。

もし急に脳症状を起して譫語する場合

陽明病、其人多汗、以津液外出、胃中燥、大便必鞕、鞕則譫語、小承気湯主之。

ここでは小承気湯を使うことになっているが大承気湯でもさしつかえない。

またこの場合譫語するのは内熱が関与しているのであり、宇板の様に裏熱とするのは間違いである。裏熱の時は第213条(桃仁承気湯)の様に血熱を生じた時、其の人、狂の如しという、譫語するに似た症状を引起す。しかし内熱の場合は第71条のように胃気不和、譫語者、与調胃承気湯というようにすぐ脳症状を引起す。

No.

小承気湯（宋板傷寒論）

大黄	4両
厚朴	2両
枳実	3枚

増液承気湯（温病条辨）

玄参	30g
生地黄	24g
麦門冬	24g
大黄	9g
芒硝	5g

熱邪による脱水の程度が激しく脈が軟で無力の場合には、単なる瀉下法（大承気湯）を用いると脱水ショックを起す恐れがある。この状態では瀉下法に滋陰法（補陰）を組合せた増液承気湯などが用いられる。

No.

茵蔯蒿湯

		利胆作用	利尿作用	清熱作用	瀉下作用
茵蔯蒿	6両	◎	○	○	
梔子	14箇	○	○	○	○
大黄	2両	○	○	○	◎

第46条 陽明病、発熱、但頭汗出、渇、小便不利者、身必発黄、茵蔯蒿湯主之。 茵蔯蒿六両、梔子十四箇擘、大黄二両洗。右三味、以水一斗二升、先煮茵蔯蒿、減二升、内梔子大黄、煮取三升、去滓、分温三服。

※条文の書出しは第45条と同じ。即ち陽明病、発熱無汗であった者に頭だけ汗が出るようになった。

※「但頭汗出」～胸部に鬱した邪が上方に重蒸されるためである。

宋板と康平本の「陽明病、無汗、小便不利、心中懊憹者、身必発黄」という条文と比較すると「但頭汗出」は心中懊憹に関係しているように思われる。

※「渇、小便不利」⇒裏証によるものである。

※「身必発黄」～胴体の皮膚が黄色になること、黄疸になること。

※胆汁が正常に腸に流出しなくなるので便秘する。

No.

桂枝加芍薬湯 及び 桂枝加芍薬大黄湯

		鎮痛・鎮痙作用	強壮作用	消化管を温める	清熱・抗菌
桂枝	3両	○	○	○	
芍薬	6両	◎	◎		
甘草	2両	○	○		
生姜	3両		○	○	
大棗	12枚	○	○		
大黄	2両				抗菌消炎作用 ○ 浮下作用

第50条 太陰病、腹満而吐、食不下、自利益甚、時腹自痛者、桂枝加芍薬湯、主之。大実痛者、桂枝加芍薬大黄湯、主之。

桂枝三両去皮、芍薬六両、甘草二両炙、生姜三両切、大棗十二枚擘。右五味、以水七升煮、取三升、去滓、温服一升。　桂枝三両去皮、芍薬六両、甘草二両炙、生姜三両切、大棗十二枚擘、大黄二両酒洗。右六味、以水七升煮、取三升、去滓、温服一升。

※「腹満而吐」～「腹満して吐し」、太陰病の症状の現われる部位は陽明内位と同一（第49条）を表す。
つまり、内寒によって吐、自利が生じ、内位（消化管）という部位が明らかにされている。

※「食不下」～食べたものが胃に収まらないこと。またこの句は次の「自利益甚」の意味を明確にする為で、つまりここまでは内寒という状態がひき起した症状である。

※「時腹自痛」～時々、あるいは間歇的に自ら痛む。この腹痛は内寒によって起ったものであるから、治療は温補と鎮痛を目的とした処方を用いる。

※「大実痛」～ここでの実は病邪の実。俗にいう、渋り腹の状態で軟便が頻数して快痛せず、腹がキリキリと痛む様な状態。

No.

黄連阿膠湯

		清熱作用	強壮・補血
黄連	4両	○ 浮心	
黄芩	2両	○	
芍薬	2両		○
鶏子黄	2枚		○
阿膠	3両		○

第52条 少陰病、心中煩、不得眠者、黄連阿膠湯、主之。

黄連四両、黄芩二両、芍薬二両、鶏子黄二枚、阿膠三両。右五味、以水六升、先煮三物、取二升、去滓、内膠、烊盡、小冷、内鶏子黄、攪令相得、温服七合、日三服。

※「心中煩」～胸中が熱っぽく苦しいこと。心煩と同じ。つまり外熱があること。

※「不得眠」～その外熱の為に眠ることができないこと。

第51条で但欲寐といい、第52条で反対に不得眠と対応語句で違う状態を対比。

- 煩して眠るを得ざるもの
- 臥するを得ざるもの
- 臥寐を得ざるもの

この方向へ病は重い

※これは少陰温病の治療剤。少陰の溶心湯ともいわれる。

No.

附子湯

		裏寒の治療	腎の炎症治療	強壮作用	鎮痛作用
附子	2枚	○	○	○	○
白朮	3両		○ 利尿作用		
茯苓	3両		○	補益作用	
芍薬	3両			○	○
人参	2両			○	

第53条 少陰病、口中和、其背悪寒者、附子湯、主之。
附子二枚炮去皮破八片、白朮三両、茯苓三両、芍薬三両、人参二両。
右五味、以水八斤煮、取三斤、去滓、温服八合、日三服。

※この条文は 第43条(白虎加人参湯)の「傷寒……口煩渇……背微悪寒者」と互文になっている。
※「口中和」～口腔内に異常な不快感、或は乾燥感或は味覚異常等がない。
つまり、口苦は胃熱に関係すること、また裏熱がなければ口渇もきたさない。この様な事から
この事でわかる事は 胃熱も裏熱もないこと、胃内停れはあるかもしれないこと、陰病であること
かもしれないこと。
※「其背悪寒」～腎に炎症のあることを示している。(腎の異常 ⇒ 裏の異常)
ここではじめて、「口中和」より裏に熱のないことから、裏の異常は寒によるものという
事になる。
※この条文は少陰病は裏寒によるものであることを示した条文。

No.

第54条 少陰病、身体疼、手足寒、骨節痛、脈沈者、附子湯、主之。

※「身体疼」～陽病でも陰病でもあり得る。
※「手足寒」～その人自らその寒を覚るをいう。典型的な悪寒ではなく、悪寒の一種と
みれば陰病であることを示すも決定的ではない。
※「骨節痛」～節々が痛むこと。つまり水毒による。しかしこの症状は陽病にも
陰病にも起る。
※従って陰病、陽病の決定は脈によって決定するほかになく、脈診をして「沈」であること
から陰病という事がはじめてわかる。
第15条(麻黄湯)の太陽病の症状に似ているが最後に脈診で判断を下す。

※この条文は少陰病が裏寒という認識だけでは処理できないことをましたもので、
裏寒即ち腎の障害がもとになって水分代謝の異常から種々の症状を引起した
例を示している。

No.

桃花湯

		止血作用	止瀉作用	温中収斂	
赤石脂	1斤	○（収斂による止血）	○		⇒ 別名 桃花石（酸化鉄を含む陶土）
乾姜	1両	○		○	
粳米	1升		○	○	

第55条 少陰病、下利、便膿血者、桃花湯、主之。 赤石脂一斤一半全用一半鉾末、乾姜一両、粳米一升。右三味、以水七升煮、米熟湯成、去滓、内赤石脂末、温服七合、日三服。

※ この条文は第54条と同じく少陰病の変証の一つであるから最後に「脈沈」が省略されたものとして解釈。

※ 陰病のときは病気に対する抵抗力が極度に低下しているので、裏位の病気もすぐに内臓に影響を及ぼして下利を起す。そして大腸に影響がでると、膿(粘液)と血(血液)を混じた便になる。

No.

呉茱萸湯

		温中散寒	鎮嘔作用	保胃作用	気逆を治す	
呉茱萸	1升	○	○	○	○	
人参	2両		○	○		
大棗	12枚		○	○	○	
生姜	6両		○	○	○	

第56条 少陰病、吐利、手足逆冷、煩躁欲死者、呉茱萸湯、主之。
呉茱萸一升、人参二両、大棗十二枚擘、生姜六両切。右四味、以水七升煮、取二升、去滓、温服七合、日三服。

※ この条文も「脈沈者」という句を煩躁欲死者の次に入れると意味がはっきりする。
つまり、体質的に虚弱で胃内停水のある人が寒邪をうけて胃寒を引起し下利をはじめ、気が上衝して嘔吐し、心煩、心悸、頭痛を起し、手足が冷え、手足をしきりに動かして全身で苦しみ、今にも死ぬかの如き苦悶する者。
手足逆冷と煩躁は嘔吐の撃激によって起因する。
従って 呉茱萸湯 ⇒ 嘔吐、気逆を改善を主となす。
四逆湯 ⇒ 下利、厥を改善を主となす。

No.

甘草湯

		益気補血	抗炎作用
甘草	2両	○	○上痛

第57条 少陰病、咽痛者、甘草湯、主之。
甘草二両。右一味、以水三升煮、取一升二合、去滓、温服七合、日三服。

※この条文もまた「脈沈者」を入れると意味がはっきりする。
咽痛は陽病とくに温病のときによく現われるが、陰病にも現われる症状であるから、
咽痛して脈が沈であるものは少陰病であると解釈した方がよい。
猖紅熱のような病気のごく初期に該当すると考えられる。
↓
溶連菌による感染症。くしゃみやせきなどによる飛沫で感染し、小さなるどもに多くみられる。
まず38～39℃を越す熱が出て、のどに痛みを訴え、つばを飲み込んでも痛みを感じます。
扁桃も赤くはれ、白い斑点がつく。熱が出てから半日ほどすると、全身に赤味を帯びた発疹
がたかり、体の皮膚全体が赤くみえる。特にわきの下や下腹部に多くみられる。舌の表面はネコ
の舌ようにざらざらとなり、イチゴ舌ともいわれる。発疹が少ないか、出ない先には咽喉
病と間違う事がある。

No.

白通湯

		温めて陰症を治す	血行解害改善	下痢を治す
葱白	4基		○	○
乾姜	1両半	○	胃的残証を促進 ○	
附子	1枚	○		

第58条 少陰病、下利者、白通湯、主之。
葱白四基、乾姜一両半、附子一枚生用去皮破八片。右三味、以水三升煮、取一升二合、去滓、分温再服。

※この条文もまた「脈沈者」という句を入れると意味がはっきりする。
裏寒がもとになっていて、その寒邪が胃をはじめとする内位を冷やした時に下利という
症状が起る。
※少陰病での脈沈とは弱いが確実に搏動がわかる脈

No.

通脈四逆湯

甘草	2両	○	
附子	一枚	甘草乾姜湯	熱薬
乾姜	3両	○	

第60条 少陰病、下利清穀、裏寒外熱、手足厥逆、脈微欲絶、身反不悪寒、其人面赤色、或腹痛、或乾嘔、或咽痛、或利止、脈不出者、通脈四逆湯、主之。甘草二両炙、附子一枚生用去皮破八片、乾姜三両。右三味、以水三升煮、取一升二合、去滓、分温再服。

※ 内寒（下利）と裏寒（手足厥逆、脈微）、外熱（身反不悪寒、面赤色）によって生じた病状をまず述べ、さらに、その激症として腹痛、乾嘔、咽痛という水分代謝異常（水毒）が加わったり、他の部分に影響が及んだりしている示し、「利止、脈不出」と普通では下痢が止むことは病状が良い方向に進むことであるから、脈状は好転するのが、ここでは「脈微欲絶」よりさらに悪化し、「脈不出」と病状が激悪していることを示している。

手足厥逆 ～ 四肢が先の方から冷えてくること。足が冷え、頭がのぼせる。

脈微欲絶 ～ 少陰病の激症である脈微細よりも一層悪化していることを示す。

身反不悪寒 ～ 少陰病は熱感がなく、悪寒が強いのが原則。ここでは厥陰病という陰病の極地であるから反対に悪寒せず熱感がでてくる。その状態は身熱（微熱）であるから「身反って」と表現したもの。

不利清穀 ～ 食べたものが消化しないで、そのまま下痢すること。胃と腸が寒冷（内寒）になった為に消化力を完全に失った状態。清（かわや）、穀（食物）

※ 従ってこの病状は厥陰病である。

病位の面から見ると、少陰病の激症（変症）は厥陰病と同じであり、緩急の相違しかない為にこの条文を少陰病篇に入れてあると思われる。

No.

猪苓湯

		利尿作用	止渇作用	清熱作用	鎮静作用	鎮咳作用	止血作用
猪苓	1両	○	○				
沢瀉	1両	○	○	○			
茯苓	1両	○	○		○		
阿膠	1両				○	○	○
滑石	1両	○		○			

第61条 少陰病、下利、欬、而嘔、渇、心煩、不得眠者、猪苓湯、主之。猪苓一両、沢瀉一両、茯苓一両、阿膠一両、滑石一両。右五味、以水六升煮、取二升、去滓、内阿膠、烊盡、温服七合、日三服。

※ この条文は少陰温病の状態で第60条の内寒と裏寒外熱に似た症状を呈しているので、厥陰病に類似するとしてここに置いてある。

※ 下痢と欬は寒邪による症状、嘔、渇、心煩は熱邪（外熱と裏熱）による症状。これを「而」の接続詞をもって結びつけている。

内寒によって下利しているときに嘔が起りにくいのであるが、それにも拘わらずこの条文のように嘔があるということは別の原因があって胃内停れを動かしていることになる。それは心煩不得眠ということから外熱の存在が考えられる。

No.

〈少陽病の定義〉

第48条 少陽之為病、口苦、咽乾、目眩也。

口、咽、目よりも下方に症状が表われたときは少陽の部位に入ったということ。

この条に解釈すると、少陽病の中心は胸部であること、下限は胃、腸の上部、膵臓、脾臓、腎臓というように陽明の部位と重複していることが処方を記した条文からうかがわれる。

〈陽明病の定義〉

第44条 陽明之為病、胃実也。

本条は胃を過ぎると陽明病の部位に入ると解釈。腹部に病邪が充満したものを胃実という。 腹部でも消化管に病邪が充満した時 ⇒承 / 腎・膀胱に病邪が充満した時 ⇒裏 } 治療法が異る。

〈太陰病の定義〉

第49条 太陰之為病、腹満、而吐、自利也。

太陰病の症状の現われる部位は陽明の部位と同一であることを「腹満」という語で示し他方相違点のあることを次に「吐」と「自利」という陰の症状で示している。

〈少陰病の定義〉

第51条 少陰之為病、脈微細、但欲寐也。

少陰病の病症は多様であって、脈状に於ても、第301条(桂枝加附子湯)では浮、第285条(麻黄湯)では沈緊、第304条(附子湯)では沈となっている。この条文は少陰病の激症をさしたものであることが脈状から推察できる。

〈厥陰病の定義〉

第53条 厥陰之為病、消渇、気上撞心、心中疼熱、飢而不欲食、食則吐、下之、利不止。

裏寒が原因であるかも裏熱による口渇と同じ症状を現わし(煩渇多飲)、裏寒により心悸亢進のはげしい、心臓部の圧迫絞扼感を伴い、それによって胸中の疼痛、苦悶、熱感をまじ、生命力が低下しているので空腹感はせず、飲食をとらなければ体力がつかないと考えて無理に食べると胃寒と胃の衰弱の為胃は体を受けつけず、すぐ吐いてしまう。食べないから便も出ないのでそれを便秘と見誤って下剤をかけると内寒の為下利が止まらなくなる(下利清穀と同じ)。

No.

五苓散 (成本傷寒論)

		利尿作用	鎮静作用	清熱作用		
猪苓	18銖	○		○		
沢瀉	1両6銖	○		○		
茯苓	18銖	○ 胃内停水を治す	○		補益	⇒利尿剤の中に桂枝を入れると血液循環を促進して利尿効果を改める。
桂枝	半両	○	○		健胃	
白朮	18銖	○	○		健胃	

○ 太陽病、発汗後、大汗出、胃中乾、煩躁不得眠、欲得飲水者、少少与飲之、令胃気和則愈。若脈浮、小便不利、微熱消渇者、

脈浮(太陽病)、小便不利(少陽病)、消渇(陽明病の裏熱の為)、

太陽病の裡で、悪寒がないつまり温病である。

○ 傷寒、汗出而渇者、五苓散主之。不渇者、茯苓甘草湯主之。

胃内停水のない裏熱の為に口渇が現われる場合

○ 中風、発熱六七日、不解而煩、有表裏証、渇欲飲水、水入則吐者、名曰水逆。

のどがかわいて水を飲むと、それをすぐに吐してしまう ⇒胃内停水がある為

○ 病在陽、應以汗解之、反以冷水潠之、若灌之、其熱被却不得去、弥更益煩、肉上粟起、意欲飲水。反不渇者、服文蛤散。若不差者、与五苓散。寒実結胸、無熱證者、与三物小陥胸湯。白散亦可服。

○ 本以下之故、心下痞、与瀉心湯。痞不解、其人渇而口燥煩、小便不利者。

○ 太陽病、寸緩関浮尺弱。其人発熱汗出、復悪寒、不嘔、但心下痞者、此以医下之也。如其不下者、病人不悪寒而渇者、此転属陽明也。小便数者、大便必鞕、不更衣十日、無所苦也。渇欲飲水、少少与之、但以法救之、渇者、

○ 霍乱、頭痛、発熱、身疼痛、熱多欲飲水者、五苓散主之。寒多、不用水者、理中丸主之。

○ 假令瘦人、臍下有悸、吐涎沫而癲眩、此水也。

やせがたの人で、へその下で動悸をうち、つばをはき、めまいを起す人 ⇒胃内停水による。

No.

理中丸（人参湯）

		裏寒を除く	補気・補血	鎮吐	止渇
人参	3両		○		
甘草	3両	○			
白朮	3両		○	○	○ 利尿作用
乾姜	3両	○		○	

○傷寒論 13条-5（霍乱病）

霍乱、頭痛、発熱、身疼痛、熱多欲飲水者、五苓散主之。

寒多、不用水者、理中丸主之。

裏寒により呕吐、下痢（水様性の下痢）のはなはだしいもの ⟹ ex.コレラ、暑気による吐渇病。

○金匱要略 第9-5

胸痺、心中痞留、気結在胸、胸満、脇下逆搶心、枳實薤白桂枝湯主之。

人参湯亦主之。

枳実薤白桂枝湯

		祛痰・鎮咳	胸痛を止める	健胃作用		
枳実	6g			○	腹痛を治す	
厚朴	6g	○		○	腹部膨満、下痢を止める	
薤白	12g		○	○		胸痺の改善
桂枝	3g		○			胸痺の改善
栝楼仁	3g	○ 清熱作用			口乾・煩渇を伴う便秘に適	胸痺の改善

胸痺：心の血脈が十分通じないもので、冠不全などに相当する。

基本的な原因は心の陽気の不足（心気虚・心陽虚）あるいは陰液の不足（心血虚・心陰虚）で、とくに陽気の不足よることが多い。さらに大きな要因として血瘀・痰が関連する。

冠不全・狭心症・心筋梗塞にみられる。

No.

四君子湯（和剤局方）

		補気	
人参	2.0	○	滋養
白朮	2.0	○	利尿・滋養・鎮静
茯苓	1.0	○	健胃・利尿・鎮静
生姜	1.0		
大棗	1.0		
甘草	1.0	○	滋養

四味（人参、白朮、茯苓、甘草）の性温、味甘、君子中和の徳に似たるを以って名ずく。

↳（純）四君子湯（益気湯）

本方は古方の人参湯の類方にして、人参湯方中の乾姜を生姜に代へ、茯苓を加えたもの

本方の応用）

① 胃腸虚弱症、諸病衰弱期、食欲不振、腹虚満、嘔吐等のものに使用

② 老人、虚人、痔出血甚しき症によきこと有り。

③ 遺尿、虚弱体質者、食血、冷え症のものに良し。

④ 手足痿弱　手足痿弱は脾胃の元気衰えたるによる。

⑤ 半身不随の一症、荏苒癒えず衰弱を来せるもの

⑥ 虚人の諸出血　唇の色なき程貧血せるもの皆この方に宜し。

〈和剤局方〉

「栄衛気虚、臓腑怯弱、心腹脹満、全く食を思わず、腸鳴泄瀉、嘔噦吐逆するを治す。大に宜しくえを服すべし。常に服すれば脾胃を温和し、飲食を進益し、寒邪瘴霧の気を辟く」

No.

四物湯（和剤局方）

		血毒の改善	補血造血	鎮静、鎮痛	強心利尿	
当帰	2.0	○	○	○	○	⇒肝臓の状態を改善
芍薬	2.0	○	○	○		
川芎	2.0	○		○		
地黄	2.0	○	○		○	

本方は金匱芎帰膠艾湯の変方なりといわれ、婦人諸病の治する華方の祖をなすもので補血造血鎮静強心の作用あり。

〈方剤の応用〉

① 月経異常　月経痛、月経不順によし。
② 産前産後の補血養生薬として用う。
③ 血脚気　木瓜 1.5　蒼朮 1.5、薏苡仁 2.0 を加えて用う。
④ 産後舌爛に本方及びその類方の応ずるもの多し。
⑤ 産後痿躄　亀板 1.5　石決明 1.5 を加え用う。
⑥ 中風、血虚によるもの。
⑦ 皮膚病、血燥のものによし、乾性陰症のものに用う。

〈和剤局方〉

「営衛を調益し、気血を滋養し、衛任虚損、脉不調、臍腹疞痛、崩中漏下、血瘕塊硬、発歇疼痛、妊娠宿冷、将理宜を失し、胎動して安からず、血下って止まず、及び産後虚に乗じ、風寒内に搏ち、悪露下らず、結して癥聚を生じ、少腹堅痛時に寒熱を作すを治す」

No.

補中益気湯（辨惑論）

		四君子湯	補気	
黄耆	2.0		○	
人参	2.0	○	○	
白朮	2.0	○	○	
当帰	1.5	(茯苓のかわり) ○	○	補血
陳皮	1.0			健胃作用、理気健脾、燥湿化痰。
生姜	1.0	○		
大棗	1.0	○		
甘草	0.8	○	○	
柴胡	0.8		○	協力作用 中気を升提する
升麻	0.8		○	

本方の原方は四君子湯なり、黄耆中を補い、人参気を益す、故に補中益気と称す。また本方に醫王湯の別名あり。東垣の醫は醫の王道なりの語による。

〈本方の応用〉

① 感冒　稟質虚弱者、又は甚しく疲労せる場合の感冒にして、発散剤を用い難きもの、又附子剤も用いられずというものによい。
② 肋膜炎　小柴胡湯の虚証にて、脈も弱く、胸脇苦満もそれほど著しからず、総体に力薄きものに用ゆ。
③ 腹膜炎　腹壁の緊張著しからず、熱状も烈しからず、虚証を呈する場合。
④ 肺尖カタル　本方証が比較的多し、殊に産後或は心労過労後に発せるものによし。
⑤ 肺結核　小柴胡湯類の用い難く、非開放性で発熱咳嗽も著しからず、脈も細数ならざるものに用ゆ。
⑥ 夏痩せ　夏季食思不振、全身倦怠して毎年夏痩せするもの早くよりこの方を用い、房事過労を慎む。
⑦ 病後強壮剤　大病後病勢大方衰えて、元気未だ回復せず、食欲進まざる者に用ゆ。
⑧ 久淋血淋　慢性淋疾にて全身虚弱なるものによし。
⑨ 痔、痔疾脱、　肛胃腸内臓虚弱下垂し、痔疾脱肛をなすもの、又久しく痢疾泄瀉の後脱肛をなすものによし。
⑩ 胃アトニー症　内臓下垂症に用ゆることあり。
⑪ 瘧疾　諸熱性病、累年愈えず、虚状を呈する者。

No.

⑫ 陰萎　脾胃虚弱のものは宗筋萎弱し、従って陰萎となる。陰部は宗筋の聚る所なればこの方によろし。

⑬ 痢疾　痢疾泄瀉各れも虚に属し、長年癒えず諸薬応ぜざるものに本方よきことあり。

⑭ 産後子宮脱出　産後元気虚耗して起るものによし。

⑮ 婦人帯下血崩　長年癒えざるものは本方の証を現わす。

⑯ 腫瘍　潰えて後、稀膿止まざるものによく肉を生ず。

⑰ 多汗症　汗出易く、汗後疲労を覚ゆるものによし。

⑱ 半身不随　元気虚乏せるもの、延年愈えざるもの。

⑲ 嘔吐　胃気虚して嘔止まざるにこの方よきことあり。

⑳ 房事過度　内傷の原因として房事失節あり、過度なるときよく本方の証を現わす。また房後の感冒に用ゆ。

㉑ 小便閉　老人、虚人、姙娠中、産後の小便通ぜざるに用いることあり。皆気虚を目当とす。

〈古今醫鑑〉

「中気不足、肢体倦怠し、口乾発熱、飲食味なきを治す。或は飲食節を失し、労倦身熱、脈大にして虚し、或は頭痛、悪寒、自汗、或は気高して喘し、身熱して煩し、或は脈微細軟弱、自汗体倦し、或は中気虚弱にして、血を攝すること能はず、或は飲食労倦して、虐痢を患い、或は元気虚弱にして、風寒に感冒し、表を発するに勝えず、或は房に入りて後に感冒する者等を治す。」

No.

六君子湯（萬病回春）

		四君子湯	二陳湯
人参	2.0	○	
白朮	2.0	○	
茯苓	2.0	○	○
陳皮	1.0		○
半夏	2.0		○
大棗	1.0	○	
生姜	1.0	○	○
甘草	0.5	○	○

本方は四君子湯に陳皮、半夏を加えたもので、即ち四君子湯と二陳湯の合方。

二陳湯（和剤局方）

「痰飲患を為し、或は嘔吐、悪心、或は頭眩、心悸、或は中脘快からず、或は発して寒熱を為し、或は生冷を食うに因って脾胃和せざる治す。」

〈本方の応用〉

① 慢性胃カタル　食欲不振、心下部不快、呑酸、噯雑等を訴へ、食血の傾向あり。*

② 慢性腸カタル　食欲衰え、体力虚弱、冷え易く、下利し易きものに用ゆ。　*脈腹虚軟の者に用ゆ。

③ 病後の食欲不振　諸病後の食欲進まざるによし、熱解せる後なり。

④ 虚弱者の頭痛眩暈　胃腸虚弱者の慢性頭痛眩暈によきことあり。

⑤ 嘔吐　脾胃虚弱と胃内停水の為起る。

⑥ 下利　諸止瀉の剤応ぜずこの方剤にてよきものあり。

⑦ 腹膜炎の虚症　熱甚しからず、音水も少く、慢性食血のものによし。

⑧ 虚弱者の感冒、咳嗽、虚弱小児の感冒咳嗽によし。

⑨ 悪阻によきことあり。

⑩ 食後嗜眠　食後臥すことを好むは脾胃虚弱なり、この方を長服する。

⑪ 神経衰弱　胃腸虚弱者の神経衰弱に甚だよきことあり。

⑫ 中風の一症　他に症状甚しからざる者に養生薬として連用するによし。

⑬ 胃癌、胃潰瘍等の一症、食欲不振、心下部疼痛、衰弱のものに用いよし。

〈萬病回春〉

「脾胃虚弱、飲食少しく思い、或は久しく虐痢を患い、若しくは内熱を覚え、或は飲食化し、難く酸を作し、虚火に属するを治す。須らく炮姜を加えて其効甚だ速せ」

No.

八珍湯（正体類要）

		四君子湯	四物湯
人参	1.5	○	
白朮	1.5	○	
茯苓	1.5	○	
当帰	1.5		○
川芎	1.5		○
地黄	1.5		○
芍薬	1.5		○
甘草	0.7	○	
大棗	0.7	○	
生姜	0.7	○	

この方は四君子湯と四物湯の合方なり

〈方剤の応用〉

① 諸病後 疲労回復せざるとき、食欲を進め、貧血を治す。熱極めて少なき場合に用う。

② 癰疽 潰えて後元気回復せざるもの。

③ 瘧後、衰弱せるものによし

④ 産後 疲労回復遅きものに用う。

⑤ 月経延期 元気衰えて月経順らざるもの。

⑥ 婦人腰痛 少しく熱あり、瘀血あるもの。

〈萬病回春〉

「肝脾傷損し、血気虚弱、悪寒し、発熱し、或は煩燥して渇を作し、或は寒熱昏瞶、或は胸膈利せず、大便窒（たづ）ならず、或は飲食少思、小腹脹痛等の症を治す」

No.

十全大補湯（和剤局方）

		四君子湯	四物湯
人参	1.0	○ ☆	
白朮	1.0	○ ☆	
茯苓	1.0	○ ☆	
当帰	1.0		○ ☆
川芎	1.0		○ ☆
地黄	1.0		○ ☆
芍薬	1.0		○ ☆
桂枝	1.0	☆	☆
黄耆	1.0	☆	
（大棗	0.7	○	）
生姜	0.7	○	）
甘草	0.5	○ ☆	
		補気☆	補血☆

本方は四物湯と四君子湯との合方なる八珍湯に更に黄耆、桂枝を加味したるもの。十薬全ふして大に能く、虚を補う。故に十全大補湯と名付くと。又気血陰陽表裏内外共に補わざるはなく、十全の效ありによるともいう。

〈和剤局方〉

「男子婦人諸虚不足、五労七傷、飲食進まず、久病虚損、時に潮熱を発し、気骨脊を攻め、拘急疼痛、夜夢遺精、面色痿黄、脚膝力無く、一切病後気奮の如からず、憂愁思傷、気血を傷動し、喘嗽中満脾腎の気弱く、五心煩悶するを治す。並に皆之を治す。此薬性温にして熱せず、平補にして効有り、気を養い神を育び、脾を醒まし、渇を止め、正を順らし、邪を辟く、脾胃を温煖して其効具さに述ぶべからず。」